

# 新島遺跡

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

新  
島  
遺  
跡

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一一

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



に い じ ま  
新 島 遺 跡

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

新島遺跡は太田市只上町に所在し、北関東自動車道の建設に伴い平成17年と平成20年の2回に分けて発掘調査された遺跡です。調査した場所は、栃木県境となっている渡良瀬川に近接しており、中近世以前の渡良瀬川の旧流路の一つと考えられている矢場川の右岸にあります。近世以前でも渡良瀬川は上野と下野の国境であり、当遺跡は国境に隣接した地にあったといえます。

発掘調査では矢場川とほぼ同位置に、今の流路よりはるかに大規模な河道の跡が見つかっており、当時の様子を肌で感じることができました。この他にも洪水による土砂で埋まった畠や、銅銭の入った骨壺など、縄文時代から江戸時代に至る各種遺構や遺物が発見されています。

発掘調査から報告書の作成にいたるまで、東日本高速道路株式会社関東支社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者の方々には種々ご指導ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で広く活用されることを願い、序といたします。

平成23年6月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一



# 例 言

- 1 本書は、北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴い発掘調査された新島遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 太田市只上町1302、1303-2、1352、1356番地他
- 3 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社（旧日本道路公団）
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成17年10月1日～平成18年2月28日、平成20年9月1日～平成20年9月30日
- 6 発掘調査体制は次の通りである。
  - 平成17年度 発掘調査担当 石塚久則（専門員）・佐藤亨彦（調査研究員）  
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社  
委託 地上測量：栗原測量設計株式会社 空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
  - 平成20年度 発掘調査担当 新倉明彦（専門員（総括））  
遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社  
委託 地上測量：アコン測量設計株式会社
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。
  - 整理期間 平成22年10月1日～平成23年4月30日
  - 整理担当 須田正久（主任調査研究員 平成22年9月～平成23年3月）  
高井佳弘（主任調査研究員 平成23年4月）  
遺物写真撮影：佐藤元彦 保存処理：関 邦一
- 8 本書作成の担当者は次のとおりである。
  - 本文執筆 新井 仁（主任調査研究員）
  - 遺物観察 石器・石造物：岩崎泰一（上席専門員） 縄文土器：橋本 淳（主任調査研究員）  
土師器・須恵器：神谷佳明（上席専門員） 中近世陶磁器・土器：大西雅弘（上席専門員）
- 9 地質調査については、株式会社古環境研究所に委託した。
- 10 出土人骨の鑑定は、宮崎重雄氏（足利工業大学非常勤講師・古生物学会会員）にお願いした。
- 11 発掘調査および報告書作成に際しては、群馬県教育委員会・太田市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
- 12 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

# 凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標（2002.4改正前の日本測地系）の北を使用している。尚、真北との偏差は、遺跡南東隅部で $0^{\circ} 15' 23.063''$ である。
- 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 遺構名称は各区で遺構種類ごとに通し番号をつけ、番号・遺構種類名で呼称した。また本文中(Ⅲ)では、各節ごとに時代順に記載し、遺構・遺物に分けて報告している。
- 遺物番号はすべて通し番号とし、遺構に関係なく器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。
- 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとした。  
遺構 溝－1：60、1：100 土坑－1：60 ピット－1：30  
遺物 小形土器・陶磁器－1：3 大形土器－1：4 石製品－1：6 錢貨－2：3  
なお、1：3以外の縮尺の遺物は、遺物番号の後に縮尺を入れた（錢貨を除く）。
- 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。下記以外は図版ごとに凡例を示す。  
遺構 溝推定範囲  カクラン範囲   
遺物 油 
- 遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西 $90^{\circ}$ 以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N- $\circ^{\circ}$ -Eとした。遺構の面積は、上端を計測した。計測はプランメーターで3回行いその平均値を採用した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し〔 〕で表した。推定で全体がわかるものについては（ ）で表した。
- 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
  - 計測値の（ ）は推定値を、〔 〕は現存値を示す。
  - 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1988年版』に基づいている。
  - 胎土表記中の細砂・粗砂・礫は、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
- 本書で使用した浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物等の呼称については、以下のように表記する。  
浅間A軽石：As-A 浅間B軽石：As-B 榛名山二ツ岳軽石：Hr-FP 榛名山二ツ岳火山灰：Hr-FA  
浅間C軽石：As-C 浅間板鼻黄色軽石：As-YP 浅間板鼻褐色軽石：As-BP
- 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。  
国土地理院 地形図 1：25,000「桐生」（平成14年5月1日発行）「上野境」（平成元年12月1日発行）  
「足利北部」（平成15年1月1日発行）「足利南部」（平成14年9月1日発行）  
国土地理院 地勢図 1：200,000「宇都宮」（平成16年8月1日発行）  
太田市 1：2,500地形図（平成18年8月測図）  
第一軍管地方迅速測図『足利町』『太田町』（明治17・18年測図）

# 目次

序

例言

凡例

目次

## I 発掘調査の実施と経過

### 1 調査に至る経緯と調査の経過

- (1) 調査に至る経緯…………… 1
- (2) 発掘調査の経過…………… 1
- (3) 整理作業の経過…………… 6

### 2 調査の方法

- (1) 調査区の設定…………… 6
- (2) グリッド設定…………… 6
- (3) 遺構の調査…………… 6
- (4) 遺構の整理…………… 7
- (5) 遺物の整理…………… 7
- (6) 報告書編集・組版…………… 7

### 3 基本土層…………… 7

## II 周辺環境

### 1 地理的環境…………… 9

### 2 歴史的環境…………… 13

- (1) 旧石器時代…………… 13
- (2) 縄文時代…………… 13
- (3) 弥生時代…………… 13
- (4) 古墳時代…………… 13
- (5) 奈良・平安時代…………… 14
- (6) 中世以降…………… 15

## III 検出された遺構と出土遺物

### 1 中世以降

- (1) 概要…………… 21
- (2) 遺構外遺物出土状況…………… 25
- (3) 遺物…………… 27

### 2 古墳時代後期～平安時代

- (1) 概要…………… 30
- (2) 遺構…………… 30
- (3) 遺物…………… 35

### 3 古墳時代中期以前

- (1) 概要…………… 36
- (2) 遺構…………… 36

### 4 縄文時代

- (1) 概要…………… 38
- (2) 遺物…………… 38

## IV 自然化学分析

### 1 新島遺跡における地質調査…………… 39

### 2 2区出土骨壺内人骨について…………… 41

## V 総括

- (1) 縄文時代…………… 42
- (2) 古墳時代中期以前…………… 42
- (3) 古墳時代後期～平安時代…………… 42
- (4) 中世以降…………… 43

## 写真図版

### 遺構写真

### 遺物写真

## 抄録

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2	第17図	1区3号溝断面図	25
第2図	調査区および隣接遺跡位置図	3	第18図	2区東端部遺物出土状況	25
第3図	3区・4区範囲確認調査トレンチ設定図	4	第19図	1面竜舞山前停車場線新島遺跡合成図	26
第4図	2区下面トレンチ位置図	4	第20図	中近世出土遺物 1 陶磁器・土器	27
第5図	調査区設定図	5	第21図	中近世出土遺物 2 土器・石製品・鉄銭・銅銭	28
第6図	グリッド設定図	5	第22図	1区2面全体図	30
第7図	遺跡の基本土層	8	第23図	1区4・5号溝	31
第8図	渡良瀬川扇状地の地形分類図	10	第24図	1区1号畠	32
第9図	遺跡周辺地形分類図	11	第25図	2面竜舞山前停車場線新島遺跡合成図	33
第10図	明治時代前半の周辺地形	12	第26図	3面竜舞山前停車場線新島遺跡合成図	34
第11図	周辺遺跡位置図	16	第27図	古墳時代後期～平安時代出土遺物	35
第12図	1区中世以降全体図(1/200)	21	第28図	古墳時代中期以前全体図	36
第13図	2区中世以降全体図(1/600)	21	第29図	古墳時代中期以前ピット	37
第14図	2区中世以降土坑・ピット	22	第30図	縄文時代遺物出土状況	37
第15図	1区1・2号溝	23	第31図	縄文時代出土遺物	38
第16図	1区3号溝平面図	24	第32図	新島遺跡1区の土層柱状図	40

# 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	17	第8表	古墳時代後期～平安時代溝一覧表	31
第2表	中世以降溝一覧表	22	第9表	古墳時代後期～平安時代畠一覧表	31
第3表	中世以降土坑・ピット一覧表	23	第10表	古墳時代後期～平安時代出土遺物数量表	35
第4表	中近世出土陶磁器・土器類数量表	27	第11表	古墳時代後期～平安時代土器観察表	35
第5表	中近世陶磁器・土器観察表	29	第12表	古墳時代中期以前ピット一覧表	36
第6表	中近世石製品観察表	29	第13表	縄文時代出土土器数量表	38
第7表	中近世銭貨観察表	29	第14表	縄文時代土器観察表	38

# 写 真 目 次

PL. 1	遺跡西上空から渡良瀬川方面を望む(西から)	2区西半部全景(北東から)	
	1区周辺遠景(南上空から)	2区西半部調査風景(北から)	
PL. 2	遺跡遠景(西から)	2区東半部全景(北東から)	
	1区遠景(北から)	2区東半部下面トレンチNo.5(西から)	
PL. 3	1区3面全景(東から)	2区東半部近世骨蔵器出土状況(西から)	
	1区北部3面全景(北東から)	PL. 5	中世以降出土遺物
PL. 4	1区1号溝全景(南から)	PL. 6	中世以降・古墳時代後期～平安時代・縄文時代 出土遺物
	1区1号溝・1号畠全景(北西から)		
	1区2号溝全景(南から)		

# I 発掘調査の実施と経過

## 1 調査に至る経緯と調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議において、道路公団から橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査実施の要請があった。これを受けて当事業団は用地解決状況、残土置場の確保、側道と本線の調査地区分の検討等、調査実施への準備を進めた。平成12年8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、当事業団の3者による「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、また、協定書に基づく公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手となった。

新島遺跡については、北関東自動車道建設事業に伴う発掘調査以前に、一般県道竜舞山前停車場線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査が、平成15・16年に当事業団により行われている。調査面積は3,669m<sup>2</sup>で、1～3面の延べ12,207m<sup>2</sup>を調査し、竪穴住居3、竪穴状遺構2、井戸2、土坑8、ピット13、溝6、水田1、畠8、河道1等の遺構が検出されている。

北関東自動車道建設事業に伴う発掘調査は、平成17年度に行うことになったが、それに先立って、平成16年8月25日から8月30日まで、同遺跡内の遺跡分布範囲確認調査を行った。調査は、この時点で未収去地であった2区を除き、1区・3区・4区について行ったものであるが、微高地・低地の確認及び遺構の分布密度の範囲確認を目的に実施した。この結果、1区の西端部を除きいずれも矢場川の旧流路に当たる低地で、表土下の層が薄く、遺構が確認できなかったため、1区の大半と3・4区は調査対象外となり、1区の西端部と2区のみ調査対象と

することとなった。

1区西端部の調査は、平成17年10月1日から平成18年2月28日まで、北に隣接する只上深町遺跡と並行して行った。

2区は1区の調査時点では未収去地であり、収去されたのが平成20年度であったため、調査は平成20年9月1日から9月30日までの期間で行った。用地収用時期の関係上、調査対象区を東西に二分する必要性が生じ、それぞれを西半部・東半部と呼称した。西半部より調査を開始し、続いて東半部の調査を行った。

### (2) 発掘調査の経過

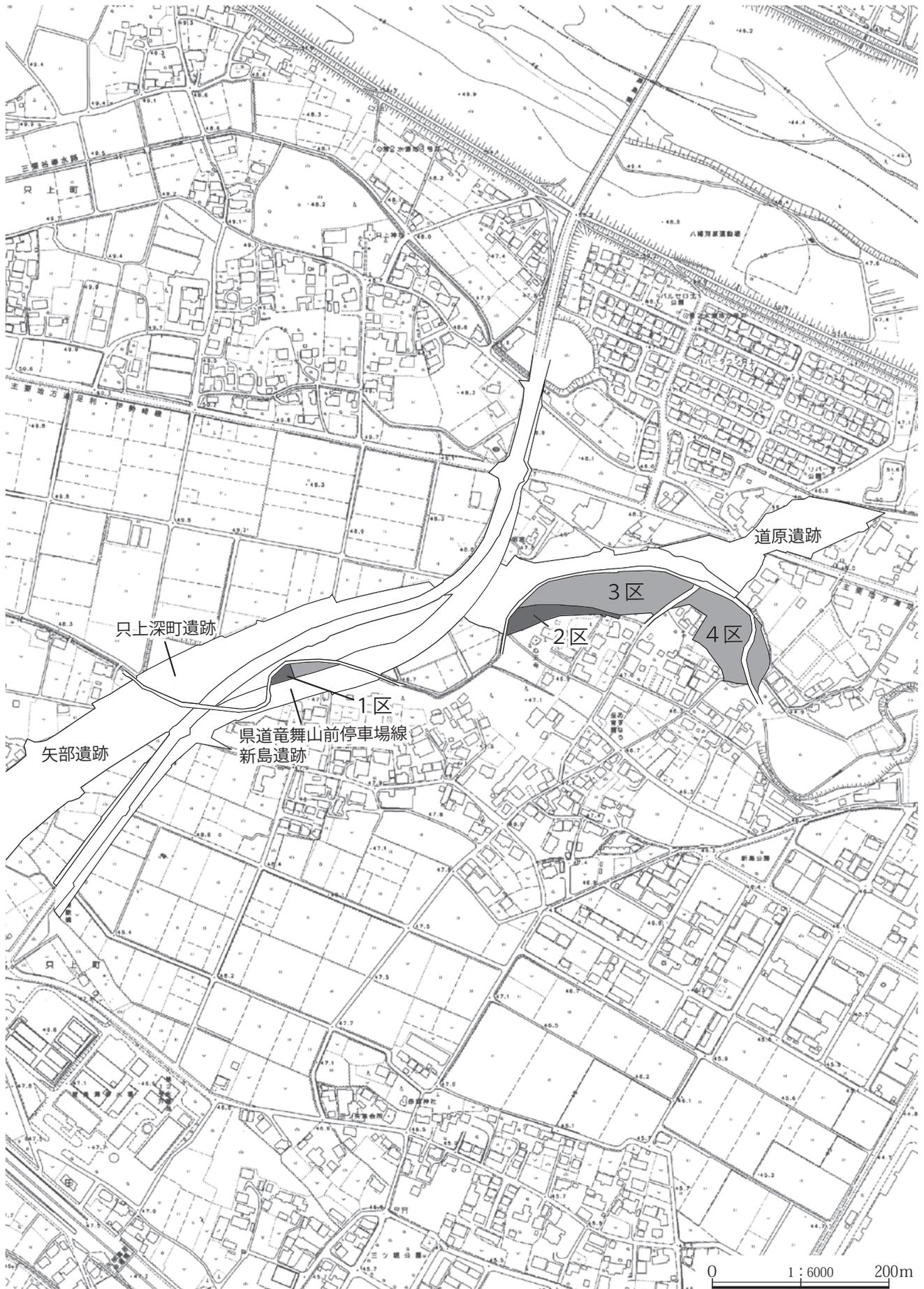
調査は、平成16・17・20年度に行った。

平成16年度は、未収去地である2区を除いた1・3・4区について、遺構分布範囲絞り込み確認調査を実施した。順次トレンチ調査を実施したが、2区東部・3区・4区はいずれも矢場川の旧流路にあたり、3区では湧水と川砂利採取による攪乱のため、4区では地表下30cmで砂礫層になってしまうため、遺構は確認できなかった。1区西部の一部(62m<sup>2</sup>)は微高地で、遺構が存在する可能性があったため、未収去地で調査できなかった2区とともに調査対象地となった。

平成17年度は、遺跡分布範囲絞り込み確認調査で調査対象となった1区西部の調査を行った。

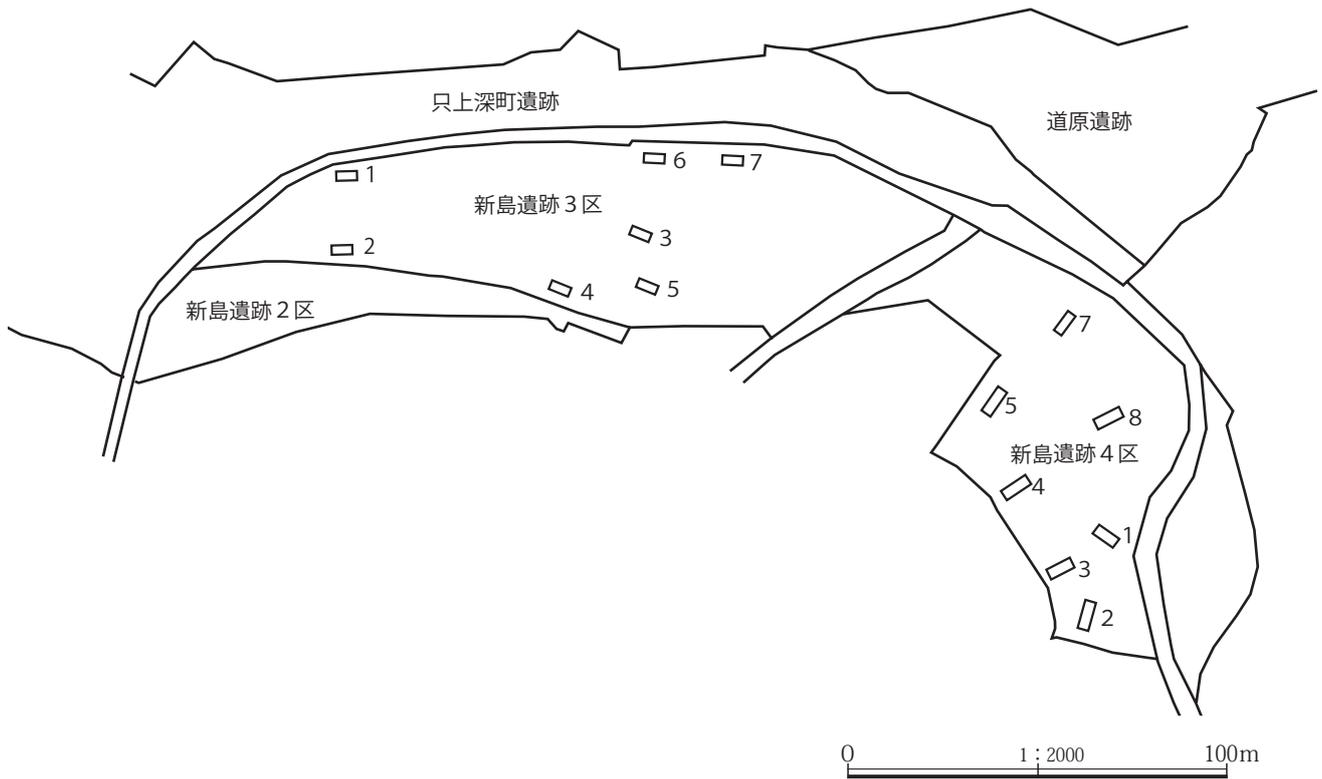
隣接する一般県道竜舞山前停車場線新島遺跡において、複数の調査面（文化層）が確認されており、本調査区でも複数の調査面の存在が想定されたため、上層から順に調査を進めた。重機による表土掘削の後、第1面の遺構確認作業を行ったところ、北東部に旧河道が確認されたため掘削したが、規模が大きく土量も多いため、重機も使用して底部の礫面まで検出した。他に溝2条を検出し（1・2号溝）、平面測量を行った。測量終了後、1・2号溝周辺に耕作土が存在していたため、これを掘削し畠を検出した（1号畠、第2面）。測量終了後、1～3号溝も含めた全景写真撮影を行って、第2面の調査を終了した。その後、2面下のHr-FAを含む黒褐色土・褐灰色



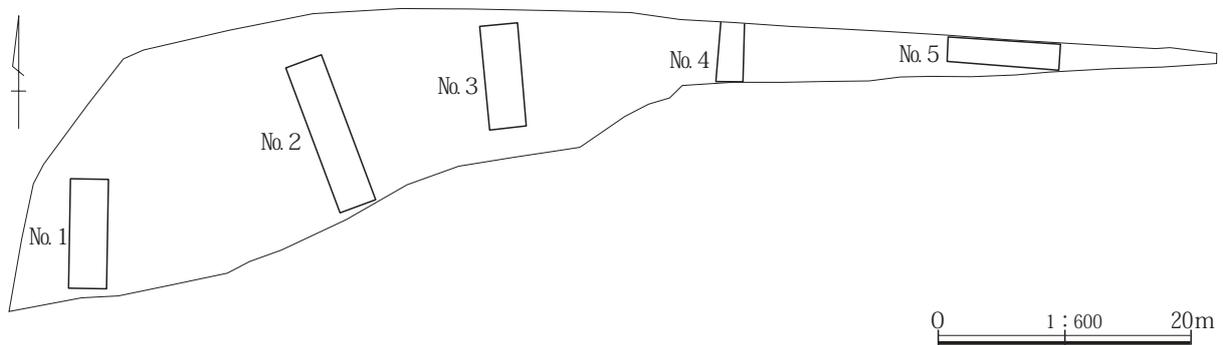


第2図 調査区および隣接遺跡位置図

(この地図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1の地形図を使用し、複製したものである。)



第3図 3区・4区範囲確認調査トレンチ設定図

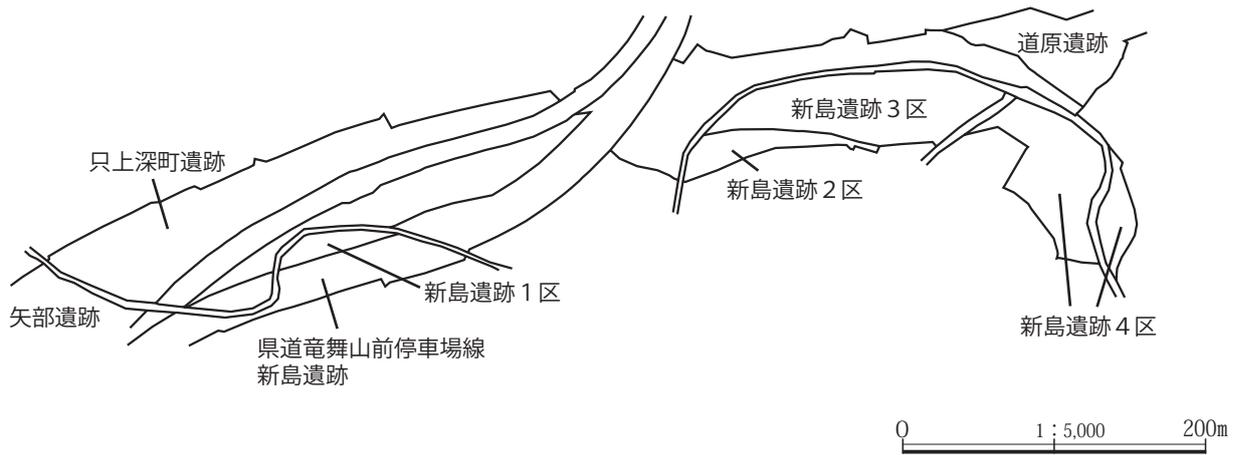


第4図 2区下面トレンチ位置図

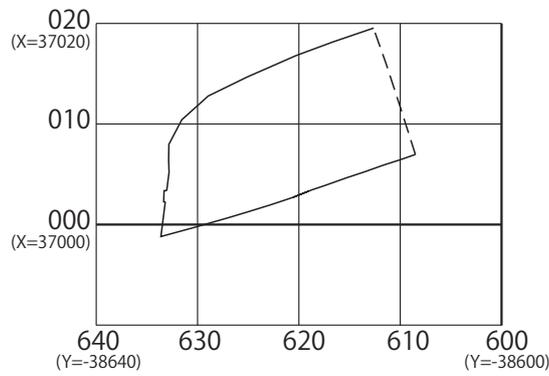
土を掘削し、その下のローム質褐灰色土上面で遺構を確認したところ、Hr-FA降下以前のピットが数基検出された(第3面)。第3面の調査終了後、さらにその下層の遺構及び旧石器時代の確認調査を行った。遺構および旧石器の遺物は検出されなかったが、縄文土器が数十点出土したため、出土位置を記録して取り上げた(第4面)。トレンチの下部は礫層となっており、これより下に遺構が存在する可能性はないため、1区の調査を終了し、埋め戻した。

2区の調査は平成20年度に行った。用地収用時期の関係上、調査対象区を東西に二分する必要が生じ、それぞ

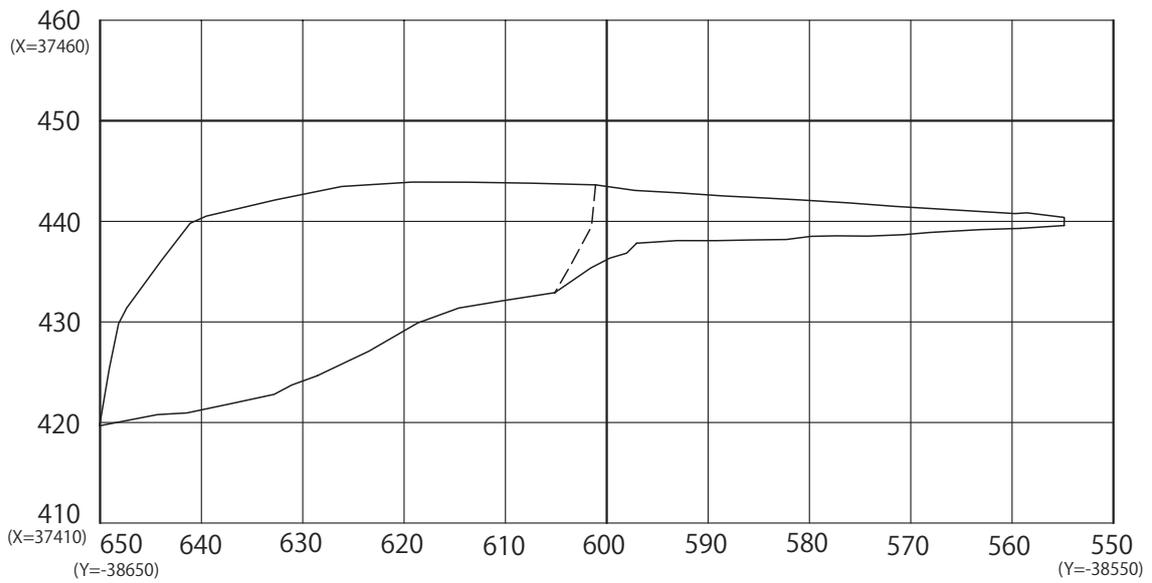
れ西半部・東半部とした。西半部は9月より調査を開始し、トレンチ調査により地表下20~30cmに水性堆積の明褐色砂質土、50~60cm下に砂礫層を確認し、明褐色砂質土上面をもって遺構確認を行い、近代の土坑1基を検出した。続く東半部は、当初隣接する墓地と同一レベル面での遺構確認を想定したが、調査の結果、比高差は現代客土によるものと判明し、西半部と同一面で遺構確認を行い、近世~近代の土坑3基を検出・調査した。また、下面トレンチ内より火葬骨・炭化材・寛永通宝銭を納めた土器が出土したが、遺構確認面下30cmほどの砂礫層中にあり、明確な遺構の検出には至らなかったため、調査を終了した。



第5図 調査区設定図



1区(日本測地系を使用)



2区(世界測地系を使用)

第6図 グリット設定図

### (3) 整理作業の経過

整理作業は平成22年10月1日から開始し、平成23年4月30日まで行った。10月から縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器等について、接合・復元・実測・トレースを行い、並行して遺構図面の修正も行った。遺構トレースはデジタルで行い、遺物実測図も手作業でトレースしたものをスキャンしてデジタルデータ化し、組版・編集はすべてデジタルデータで行った。そして平成23年5月に報告書入札を行い、報告書を刊行した。また、出土遺物や遺構・遺物図面類の収納も行って、すべての作業を終了した。

## 2 調査の方法

### (1) 調査区の設定

新島遺跡と北に隣接する只上深町遺跡との境界は、矢場川の流路であるが、川と路線の位置関係から、北関東自動車道新島遺跡は調査個所が分断され、西部の狭い調査区と東部の比較的広い調査区の2か所となっている。

このため、西部の調査区を1区とし、東部の調査区では、現道や畑の地境を境界として西から東に向かって2～4区を設定した。しかしながら、1区東部・3区・4区は遺構分布範囲絞り込み確認調査で遺構なしとなり、実際に調査を行ったのは遺構分布のあった1区西部・2区だけとなった。

### (2) グリッド設定

グリッドは、北関東自動車道関連遺跡すべて共通で、X軸、Y軸ともに国家座標（日本平面直角座標第IX系）の下3桁の値を用い、X軸-Y軸の順に併記し、その南東隅のポイント名をグリッド名としている（例350-850）。2002年4月に測量法が改定され、測地系が日本測地系から世界測地系に変更になったが、北関東自動車道関連の発掘調査では、改定以前の測地系をそのまま使用してきた。よって一連の北関東自動車道関連の発掘調査の流れの中で行われた1区の調査では、日本測地系を用いたグリッドを設定している。しかしながら、2区は調査が2008年となり、改定から長期間経過して日本測

地系を使用できないため、改定後の世界測地系を用いた座標を基準としてグリッドを設定しており、結果として1区と2区でグリッドの位置がずれてしまっている。

ずれは、2区南西隅部で、X軸が351.3877m、Y軸が-281.4938mとなっている。調査区の位置は、北関東自動車道の実測図や太田市1:2,500地形図等に入っているため、隣接遺跡等との位置関係がずれることはなくっている。（第2図参照）グリッドの最小単位は1mであるが、方眼杭や遺物取り上げなどは10mグリッド（下一桁0）を用いた。

### (3) 遺構の調査

基本土層における1区I～III層、2区I層は重機で除去した。その後1区IV層上面、2区II層上面から遺構確認作業を行い、プランの確認後遺構を掘り下げた。遺構の掘削は人力によるが、1区3号溝は矢場川の旧流路にあたり、規模が大きく人力では掘削しきれないため、一部小型の重機を使用した。また、調査面が多数にわたるため、随時トレンチ調査を併用して、調査面を確認しながら進めた。遺構番号は調査区により調査年・調査担当者等が変わっており、遺跡全体の通し番号とすると番号の重複や欠番が多くなる可能性が高いため、調査区ごとに1から通し番号を付した。

1区と2区は、調査年度が平成17年度と平成20年度とかなり離れてしまっており、その間に遺構写真撮影・遺構測量において当事業団で方法に変更が生じている。

遺構写真撮影は、1区は、6×7・6×6ブローニーモノクロフィルム、35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムの3種類を基本としておこない、全景写真については、ラジコンヘリコプターによる空中撮影を行った調査面もある。2区は、6×7・6×6ブローニーモノクロフィルムとカラーデジタルの2種類を基本としている。

遺構測量は、1区は断面図を手実測で行い、平面図は電子平板によるデジタル測量を行っている。2区は断面図は手実測で作成しているが、デジタルデータ化している。平面図は電子平板によるデジタル測量をおこなっている。

#### (4) 遺構の整理

遺構図は、1区断面図14枚・平面図8枚、2区断面図6枚・平面図8枚（調査時点の全体図含む）で、計36枚である。1区断面図は手実測による図であるが、1区平面図・2区断面図・2区平面図はデジタル測量（あるいは手実測をデジタルに変換）によるため、デジタルデータを紙に出力した図とともにEPS形式のデータが存在している。整理作業では、断面図・平面図の照合・修正を行った後、手実測の断面図はスキャニングしてドローソフトによるデジタルトレース、EPSデータは同ソフトにより修正編集して報告書掲載図とした。

遺構写真は、モノクロフィルム写真は、ブローニー・35mmそれぞれについてすべてのネガに通し番号を付し、ベタ焼きを切り貼りしてブローニー・35mmをまとめて遺構ごとに並べ、撮影データを記録してネガ検索台紙を作成した。カラーリバーサル写真は、遺構ごとに並べて撮影データを入力し、スライドボックスに収納した。カラーデジタル写真は、撮影データをファイル名に入れてハードディスク・DVDに収納した。整理作業では、報告書に掲載する写真を選定し、モノクロフィルム写真・カラーリバーサル写真はスキャニングし、デジタル写真とともにフォトタッチソフトで明度・コントラスト等を調整して報告書掲載写真とした。

#### (5) 遺物の整理

遺物は洗浄後、遺跡略号（KT-750）、調査区、調査面、遺構名・グリッド名等、遺物No.を記入した。

整理作業においては、まず種別・器種に分類し、縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器、石器・石製品等のそれぞれについて、接合・復元・写真撮影・実測・トレースを行った。実測は手作業で行ったが、残存状況の良いものについては、長焦点デジタルカメラと三次元計測システムで測定し、最終確認は手作業で行って図化した。トレースも手作業で行い、作成したものをスキャニングしてデジタルデータ化し、報告書掲載図とした。

写真撮影は、当事業団写真室でデジタルカメラを用いて行い、遺構写真同様フォトタッチソフトで明度・コントラスト等を調整して報告書掲載写真とした。

#### (6) 報告書編集・組版

以上のような作業で作成した図・写真と、別に作成した本文・表・土層注記等の文章をDTPソフトによりレイアウトを行い、修正後組版して印刷原稿を作成した。その後内部校正を繰り返し行い、修正・加筆を実施して入稿した。

### 3 基本土層

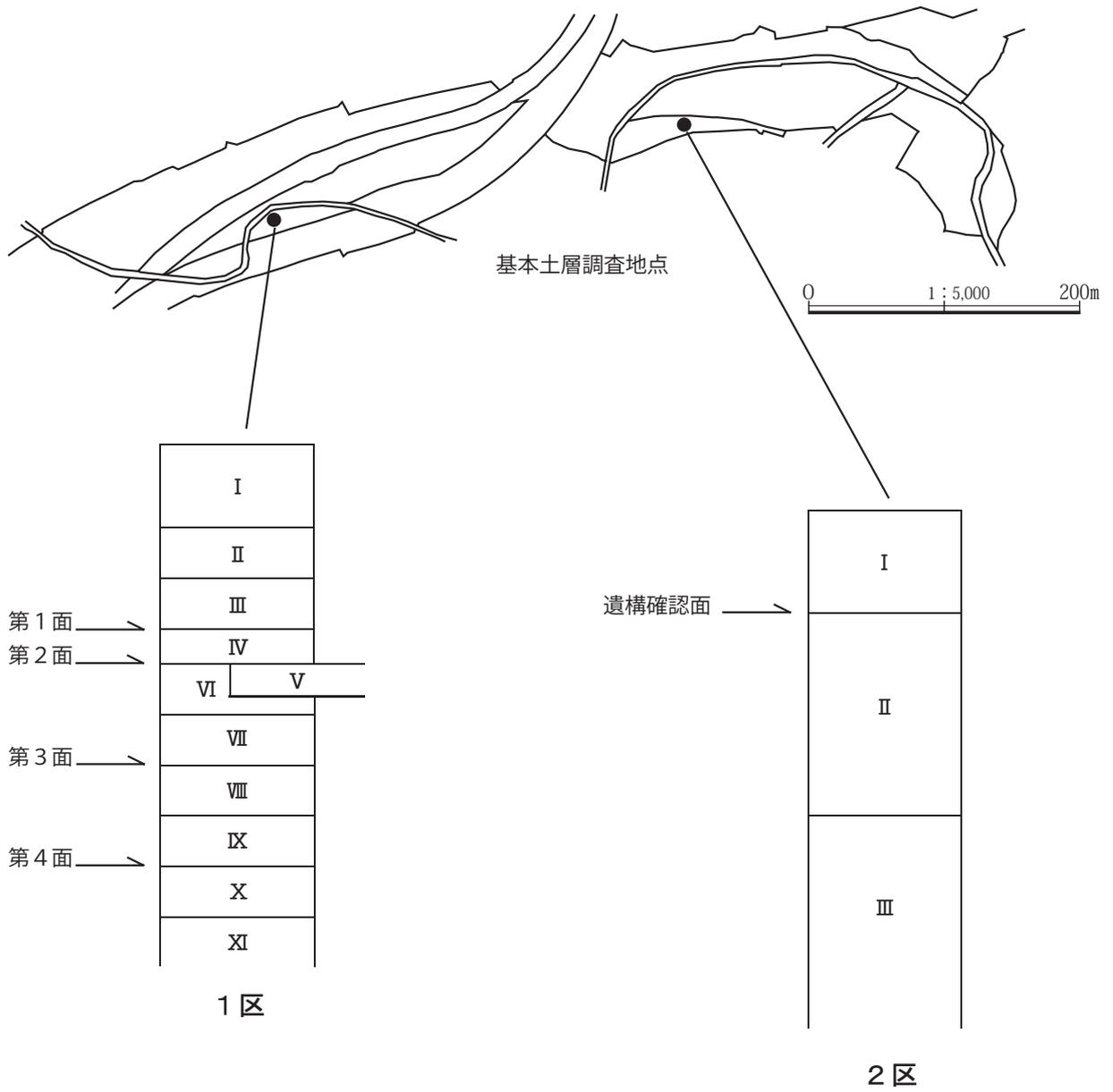
新島遺跡の土層は、1区と2区で概ね300mの距離があるため、堆積状況に差が見られるが、いずれも矢場川の氾濫時の水性堆積による層が上層に見られる。

1区は表土の下には水性堆積シルト層が3層（上から暗灰黄色土・にぶい黄色土・灰黄色土）堆積しており、その下にはHr-FAを混入する黒褐色・褐灰色の粘質土が堆積している。シルト層とHr-FA混入層の間に、古墳時代後期～平安時代の畠が確認されており、部分的にその耕作土が存在している。その下にはローム質の褐灰色土・浅黄色土が堆積し、下層の浅黄色土は縄文時代の遺物包含層となっている。さらにその下層に黄灰色土・褐灰色土が堆積し、その下は旧河道と考えられる砂礫層となっている。

1区の遺構確認面は、中近世の第1面が上部からにぶい黄色シルト層下面、古墳時代後期～平安時代の第2面がHr-FA混入黒褐色土層上面、古墳時代中期以前の第3面がHr-FA混入褐灰色土層下面、縄文時代の第4面がローム質浅黄色縄文包含層下面となっており、計4面存在している。

2区は、20～30cmの表土の下に水性堆積の明褐色砂質土、50～60cm下に旧河道面と考えられる砂礫層が堆積している。東部では水性堆積の明褐色砂質土の上部に昭和30年代のものと考えられる客土が存在していた。2区には1区で見られたHr-FA混入層やローム質の層は見られず、水性堆積層の下は直接砂礫層になっている。

I 発掘調査の実施と経過



- 1区
- I 表土
  - II 暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト層
  - III にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト層
  - IV 灰黄 (2.5Y6/2) シルト層
  - V 暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト層 畠耕作土
  - VI 黒褐 (10YR3/1) 粘質土、FA多量混
  - VII 褐灰 (10YR4/1) 粘質土、FA少量混
  - VIII 褐灰 (10YR5/1) ローム質土
  - IX 浅黄 (5Y7/3) ローム質土 縄文包含層
  - X 黄灰 (2.5Y4/1)
  - XI 褐灰 (10YR5/1)

- 2区
- I 昭和30年代客土
  - II 灰黄褐 水性堆積砂質土  
均質で微細粒・河川氾濫時の  
オーバーフロー堆積か。自然  
堤防を形成。
  - III 砂礫層 旧河道面 粗粒砂と  
φ30～150mm程の円礫

第7図 遺跡の基本土層

## II 周辺環境

### 1 地理的環境

本遺跡のある太田市は、関東地方北西部に位置している。この地域は大別して、山地・火山地・丘陵地・台地および低地に分けられる。山地としては、南西に関東山地、北東に足尾山地が分布しており、火山地としては赤城山・榛名山がある。丘陵地は関東山地の北から東の前縁に低い山々が連続的に分布している。台地は丘陵地の下方に広がり、それらの台地を刻みながら利根川と支流の渡良瀬川が流れ、河川によって完新世に入ってから形成された沖積低地が広がっている。

太田市域を見ると、市の北東部に、この地域において最も顕著な地形である、八王子丘陵と金山丘陵が存在している。八王子丘陵は北西から南東方向にのびる分離丘陵で、長楕円形を呈している。長さ約7km、幅約2.8km、最高点は293.9mである。金山丘陵も平野に孤立する分離丘陵で、最高点は235.8mである。八王子丘陵の南東に位置し、現在はごく低い鞍部を境として離れているものの、かつては一続きだったと考えられている。いずれの丘陵も元々は足尾山地の延端部であったものに断層が生じ、さらに大間々扇状地を形成した渡良瀬川が約24,000年前ころから流路を東へ変えたことにより、現在の独立した丘陵になったとされている。

八王子・金山丘陵の西には大間々扇状地が存在している。大間々扇状地は、渡良瀬川の谷口、旧大間々町を扇頂とし、太田―伊勢崎を結ぶ線（標高50～55m）を扇端とする、南北約18km、扇端の幅約13kmの大規模な扇状地である。この扇状地は、大きく西半部の桐原面と東半部の藪塚面の新旧2面からなっている。桐原面は扇頂の旧大間々町桐原から伊勢崎市東部、旧境町にかけて発達する古期扇状地で、藪塚面とは比高4～6mの緩斜面状段丘崖で分けられ、境界部を早川が南下している。この面には厚さ2m以上の上部・中部ローム層が堆積している。藪塚面は大間々市街地から旧笠懸町、旧藪塚本町、旧新田町へと発達する新时期扇状地で、厚さ1m前後の上部ローム層に覆われる。

八王子・金山丘陵の東には渡良瀬川扇状地が存在し、本遺跡はこの扇状地上に立地する。渡良瀬川扇状地は八王子・金山丘陵と足尾山地の間に広がる扇状地で、桐生市赤岩橋付近（標高120m）を扇頂部とし、太田市下小林から足利市御厨地区（標高30m）を扇端部とする、南北18km・東西7.5kmを測る大規模扇状地である。「太田市史通史編 自然」によると、扇状地はⅠ～Ⅲ面に区分され、最古期のⅠ面が八王子丘陵から金山丘陵の東麓に沿って細長く分布し、その東側にⅡ面が、さらにその東、現河道側に扇状地Ⅲ面が広がる。その形成年代はⅠ面がAs-BP降下以前に遡り、Ⅱ面は洪積世末の再堆積ローム、Ⅲ面については完新世の所産とされている<sup>(1)</sup>。

この区分に従うと、当遺跡は渡良瀬川の旧河道とされる矢場川が遺跡の境界となっており、第1章で述べたように、基本土層において、1区と2区で大きく異なり、1区に存在したローム質土が2区には存在していないことなどから、扇状地Ⅱ面と扇状地Ⅲ面の境界に位置していると考えられる。

しかしながら、北関東自動車道関連の発掘調査の結果、降下テフラの堆積に齟齬が生じており、再検討の余地が生じている<sup>(2)</sup>。すなわち、太田市八ヶ入遺跡<sup>(3)</sup>や東長岡戸井口遺跡<sup>(4)</sup>では暗色帯を切る洪積世の再堆積ローム、及び、その上面のAs-YPを確認しており、より複雑な地形発達が予想されることになり、図の修正が必要だとされる。

八王子・金山丘陵以東の北関東自動車道関連の発掘調査では、西から、峯山・萩原・古氷条里制水田跡・二の宮・八ヶ入・大道西・大道東・楽前・鹿島浦・向矢部・矢部・只上深町・新島・道原の14遺跡が、関連事業に伴い1遺跡（東今泉鹿島遺跡）が発掘調査されているが、以下「大道東遺跡(1)」の記述を引用して渡良瀬川扇状地の地理的環境についてその概要を記す。

八ヶ入遺跡では、暗色帯以上のローム層が通常堆積した細石刃石器群の出土地点と、それより東の河川性再堆積ロームの堆積地点が存在した。これについては渡良瀬川変流（東遷）に伴う侵食によることが確実であり、同様

## II 周辺環境

なロームの堆積地点は東長岡戸井口遺跡でも確認されている。これにより同段階の台地が金山丘陵東縁に広がるのが確実となり、太田市竜舞地区の岩宿面(第8図)に続く地形面とすることができるだろう。

扇状地Ⅰ面については、澤口原図に従えば、大道西・大道東2遺跡の所在する東今泉の台地が該当、As-BPが堆積するということになるのであろうが、詳細は明らかでない。As-BPについて言えば県央旧石器遺跡の発掘では同テフラは必ず存在し、識別が容易なことからみて、あれば気づくはずである。可能性として肉眼観察できるほど堆積していなかったということかもしれないが、テフラ分析が行われていないため、結論づけられないのが現状である。太田市史通史編の図1-24の3地点ではAs-BPが良好に堆積しており、1.5kmと近距離にある本遺跡周辺で確認されないのは不自然で、これにより複雑な地形発達を想定せざるを得ない。

扇状地Ⅱ面については、矢部遺跡以西が該当する。現河道を流れるようになる前の旧河道については、現在の葦川・矢場川の流路が想定されているが、発掘調査では複数の旧河道が明らかにされており、絶えず流路を変えていたようである。現在の流路についてその変流年代は不明だが、板倉町西岡付近では縄文から古代の遺跡(渡良瀬川河床遺跡)の上を流れており、これと矢部遺跡周辺の遺構検出状況を考え合わせれば、利根川変流と同時期中世後半の変流という可能性も否定できないだろう。

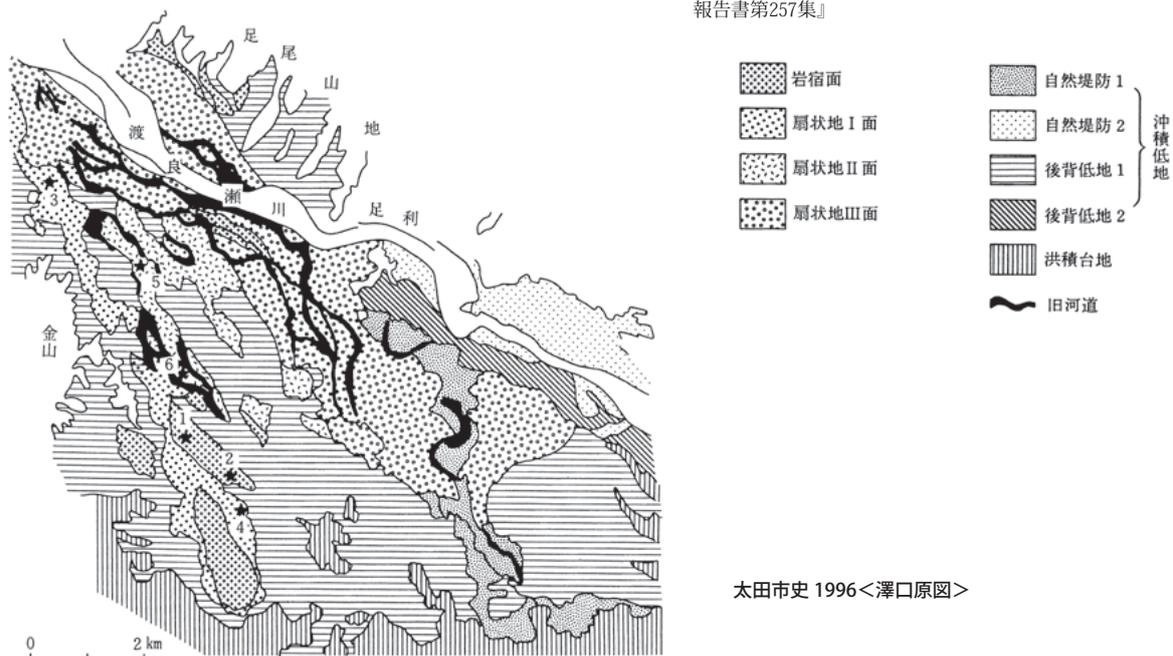
扇状地Ⅲ面については、縄文から古代の集落が発見されている。扇状地Ⅲ面は足利市市場町付近から百頭町付近まで広がるようであるが、北関東自動車道関連の発掘成果及び遺跡分布を見る限り、足利市浅間山付近を境に新旧2分されることになるかもしれない。

遺跡の立地する渡良瀬川扇状地を概観した結果、渡良瀬川は徐々に東遷したのではなく、途中矢場川付近を流れる段階があり、扇状地Ⅲ面が細分されるだろうことが想定されることとなった。具体的には、足利市浅間山付近から東武線「あがた駅」周辺域を抜け、新时期扇状地を形成する段階がそれで、扇状地地形を良く残している。加えて、東今泉の台地を含む北関東自動車道の路線内には、金山丘陵末端の台地縁辺(古水条里制水田跡・八ヶ入)を除いてAs-BPの堆積する台地はなく、従来の地形区分を見直す必要が生じている。

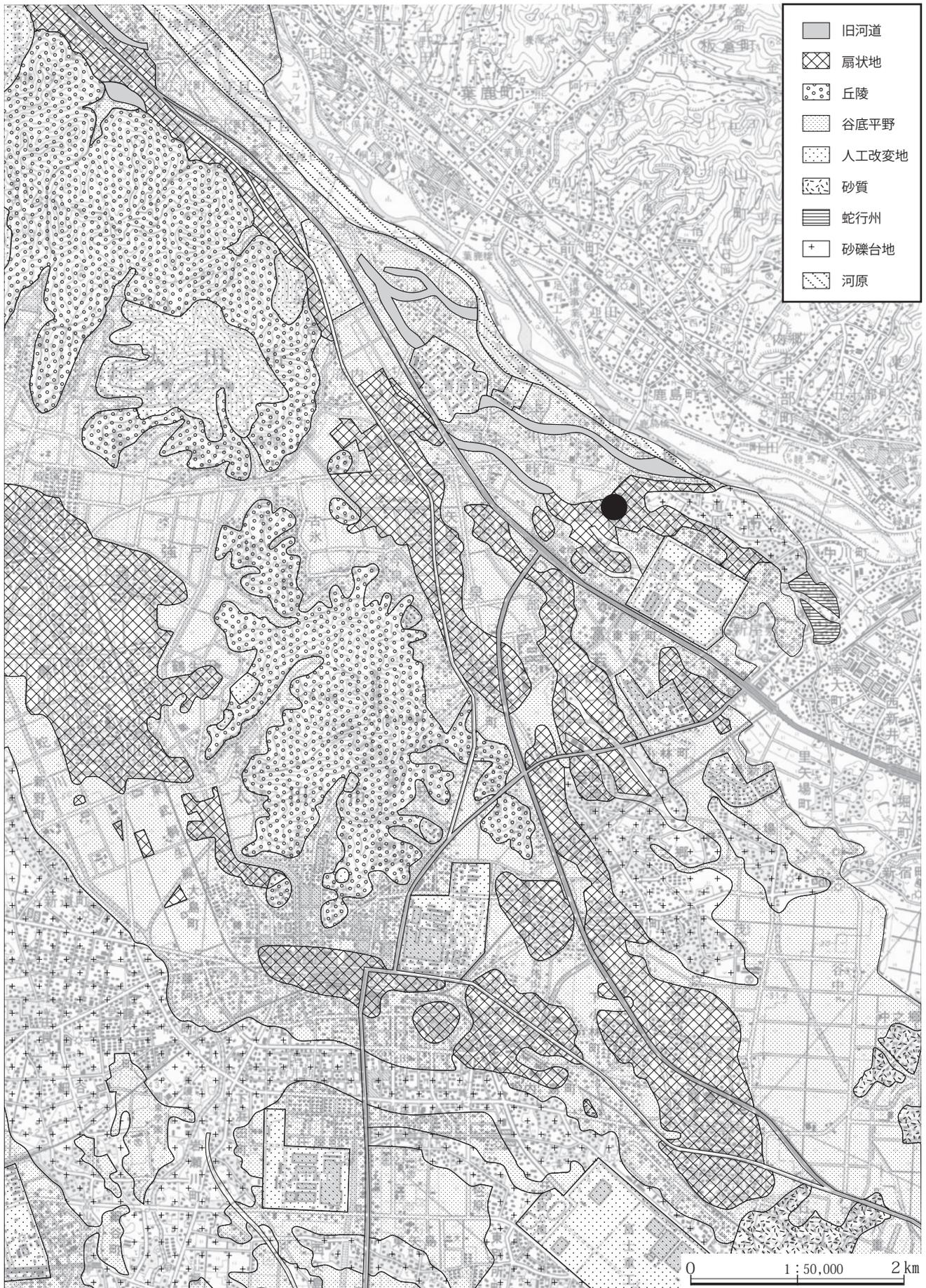
以上のように修正を要する点もあるが、当遺跡が扇状地Ⅱ面とⅢ面の境界にあるということは変わらないと考えられる。今後調査成果を総合することにより扇状地の地形発達の詳細が判明し、地域発達の様相解明が期待できると考えられる。

注

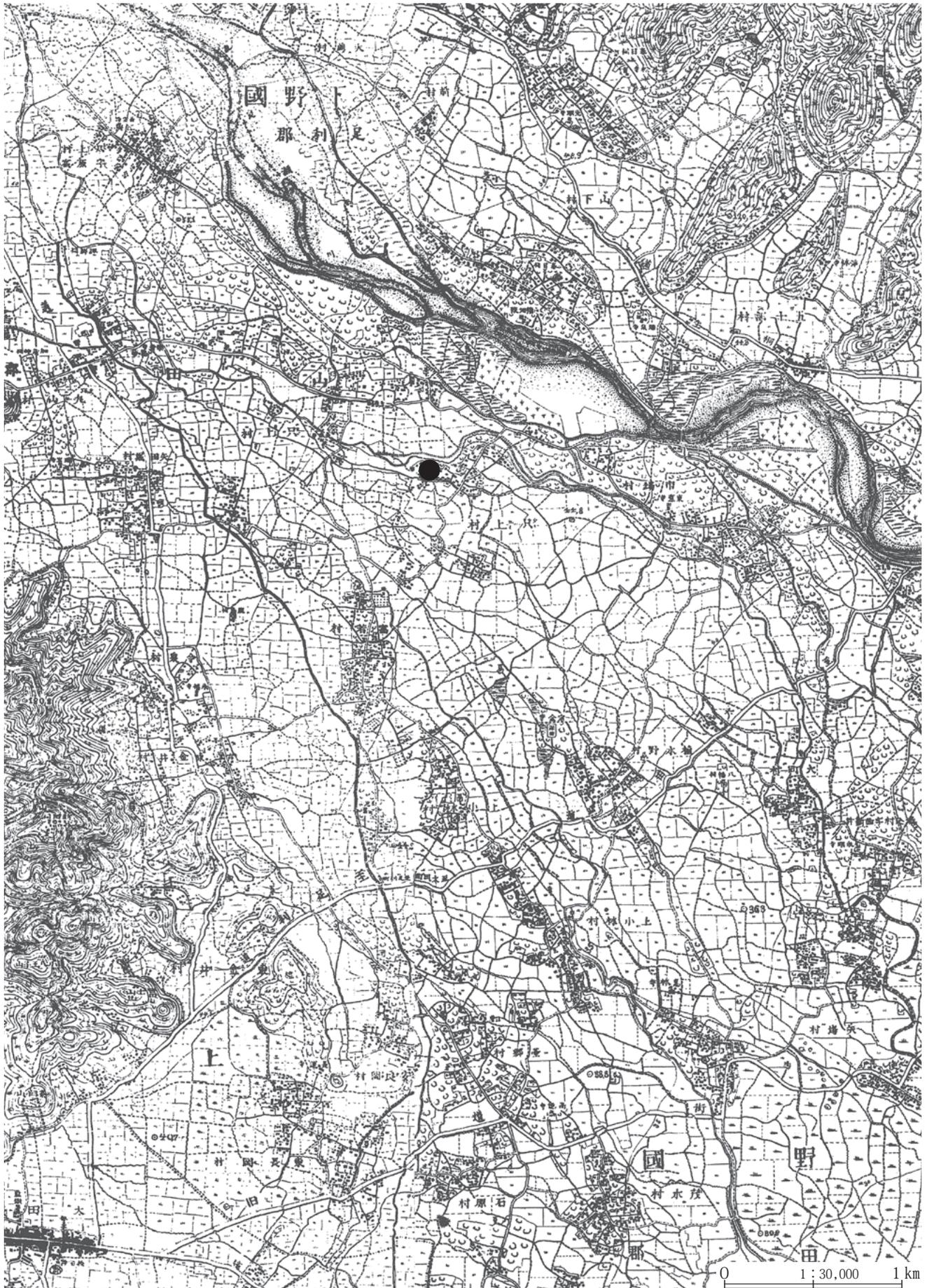
- (1) 澤口 宏 1996「第6節 平野の地形・地質」『太田市史 通史編 自然』太田市
- (2) 岩崎泰一 2009「1 自然環境」『大道東遺跡(1)事業団報告書第464集』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『八ヶ入遺跡Ⅰ 事業団報告書第505集』
- (4) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『東長岡戸井口遺跡 事業団報告書第257集』



第8図 渡良瀬川扇状地の地形分類図



第9図 遺跡周辺地形分類図（群馬県『土地分類基本調査』深谷（1991）桐生及足利（1997）による）



第10図 明治時代前半の周辺地形（第一軍管地方迅速測図『足利町』『太田町』（明治17・18年測図）を使用）

## 2 歴史的環境

新島遺跡は、渡良瀬川中流右岸に位置し、渡良瀬川と八王子丘陵・金山丘陵に挟まれた渡良瀬川扇状地上に存在する。以下、当遺跡周辺の歴史的環境を、時代を追って述べることにする。

### (1) 旧石器時代

渡良瀬川扇状地地域では、旧石器時代の遺跡は多くないが、石刃および石刃製ナイフ形石器を伴う石刃石器群が、東長岡戸井口遺跡から出土しており、湧別技法による細石刃群が、扇状地西端部の八ヶ入遺跡から出土している。また、矢部遺跡からチャート製の剥片が出土している。

当遺跡からやや離れるが、扇状地の西側、八王子・金山丘陵間の鞍部にあたる場所に旧石器時代の遺跡が集中している。特に、峯山遺跡ではチャート製の石器群と黒曜石製の切出形ナイフ形石器を組成する石器群の2つの文化層が確認されている。また、強戸口峯山遺跡では、硬質頁岩性の荒屋型彫刻刀形石器が採集されている。

渡良瀬川左岸の地域には旧石器時代の遺跡は少なく、平石遺跡からチャート製の石器が出土している程度である。

### (2) 縄文時代

渡良瀬川流域の縄文期遺跡は、渡良瀬川扇状地Ⅰ面に多く見られる。扇状地の地質区分に従えば、より新期の太田市東部域の扇状地には縄文遺跡は存在しないということになるが、この地域は地盤沈降が著しく、渡良瀬川の氾濫層に厚く覆われ、その実態は不明である。

太田市域の縄文遺跡は八王子丘陵及びその周辺部台地、大間々扇状地Ⅱ面・由良台地等の台地縁辺部に多く立地している。渡良瀬川扇状地上では、金山丘陵東部北寄りの下宿遺跡で検出されている草創期の土坑が最も古い遺構で、早期では金山丘陵北東部の東今泉鹿島遺跡で押型文土器が出土している。続く前期は、金山丘陵東部南寄りの細田遺跡と同南東部の下小林上遺跡および北部丘陵沿いの二の宮遺跡で集落が、東今泉鹿島遺跡で土坑が検出されている。中期後半になると、金山丘陵北東部の大道東遺跡から築前遺跡にかけて中期後半～後期前半の集落や土坑が検出され、多量の遺物も出土している。

渡良瀬川沿いの地域では道原遺跡から中期の集落が、矢部遺跡から中期後半～後期前半の土坑が検出されている。後期後半以降は遺跡が極端に減少し、遺構も検出されておらず、この時期から弥生時代にかけて、居住活動は、ほとんど行われていなかったと考えられる。

渡良瀬川左岸では前期までの遺跡が多く、宿居館跡から撚糸文系の土器や前期の土坑が、平石遺跡からも撚糸文系土器を含む草創期から前期の遺物が出土しており、春日遺跡からは前期の集落が検出されている。しかしながら、中期以降の遺跡は少なく、遺構もほとんど検出されていない。この地域は、縄文時代中期以降古墳時代前期まで遺跡は少なく、居住活動はあまり活発でなかったといえよう。

### (3) 弥生時代

渡良瀬川流域における弥生時代の遺跡は極めて少なく、金山丘陵北東部の小丸山遺跡で遺物の散布が認められるほか、同東部の磯之宮遺跡で中期の住居が検出されており、さらに東の渡良瀬川流域付近の八幡山・芋の森遺跡で中期の土器が確認されている程度である。しかしながら、金山丘陵や八王子丘陵周辺や沖積地内の低台地上においては、中期の資料が散見されてきている。

渡良瀬川左岸でも弥生時代の遺跡は少なく、大前西山遺跡で遺物の散布が認められる程度である。

### (4) 古墳時代

古墳時代前期になると、八王子・金山丘陵西部においては遺跡の分布が急激に増加する。渡良瀬川扇状地上ではそれほど多くはないが、集落は、八王子丘陵南東側の丸山北遺跡で確認されているほか、金山丘陵東部にやや離れて位置する磯之宮・矢場向・駒形・駒形南遺跡や、南東部にやや離れて位置する下小林上遺跡で検出されている。他に東今泉鹿島遺跡で前期末から中期初頭にかけての集落がみられ、竪穴住居11軒がまとまって検出されている。他の遺構としては、古氷条里制水田跡で前期の土器が多量に出土した溝が検出されている。墳墓には古墳と周溝墓がある。古墳は、金山丘陵東部にあって、距離はかなり離れるが全長80mの前方後円墳である矢場薬師塚古墳や、全長117.8mの前方後方墳である藤本観音山古墳があり、周溝墓は、渡良瀬川沿いの道原遺跡や金

## II 周辺環境

山丘陵南東部の細田遺跡で方形周溝墓が見られるが、全体的に遺跡数は少なく、丘陵の西部とは大きく異なっている。渡良瀬川左岸では前期の遺跡はさらに少なく、春日遺跡で方形周溝墓が検出されている以外は、確実に前期と断定できる遺構のある遺跡はほとんどない。

中期以降、遺跡は次第に増加する傾向にあり、後期になると集落が増加するだけでなく、須恵器窯等の生産遺跡が見られるようになり、古墳も多く残るようになる。

中期の集落は前述の東今泉鹿島遺跡や八ヶ入遺跡など、金山丘陵北東部地域や、丘陵東部のやや離れた位置にある、旧太田工業高校北裏遺跡や前期から続く駒形遺跡・矢場遺跡、丹羽倉遺跡等で住居や遺物が検出されている。中期の古墳は少なく、丘陵南東部に天神山・女体山古墳があるが、他に中期とわかるものは、金山丘陵東部からやや離れて位置する、径60mの円墳である上小林稲荷山古墳がある程度である。

後期の集落は、金山丘陵北東部の大道東および楽前遺跡付近に100軒以上住居が集中しており、金山丘陵で開始された須恵器等の生産との関連が窺える。他に八王子丘陵南東裾部、金山丘陵南東部等で見られるが、遺跡数は少なく、検出住居数も多くない。渡良瀬川左岸地域においても同様である。

生産遺跡は、金山丘陵北東部を中心に検出されている。菅ノ沢遺跡、八幡窯跡群、辻小屋窯跡群、亀山須恵器窯跡等、須恵器窯が40基以上確認されており、この時期の一大生産地であったといえよう。操業開始時期は、表採資料等から6世紀前半までさかのぼると考えられるが、大規模に生産されるようになるのは6世紀中ごろ以降で、7世紀前半までの間に丘陵東裾から北裾にかけて集中して30基ほど存在している。7世紀末から8世紀初頭になると、丘陵西側に移動して操業しており、この時期に大きく窯場が移動している。

古墳は、群集墳が多く築造されるようになり、中期以前に比べ数が圧倒的に増えている。分布が多いのは、金山丘陵北東部から八王子丘陵南東部にかけての地域や、金山丘陵南東部、金山丘陵南西部、金山丘陵から東にやや離れた矢場川流域等であり、渡良瀬川左岸にも多くの古墳群が存在している。金山丘陵北東部では、亀山京塚古墳、家型石棺を有する今泉口八幡山古墳、菅ノ沢御廟古墳、東毛地域唯一の終末期方墳である巖穴山古墳等が

集中しており、この時期この地域の中心的な場所であったことが窺え、金山丘陵の窯跡群との関連も考えられる。金山丘陵南東部では、丘陵の裾に沿って金井口古墳群、亀山古墳群、内並木古墳群、馬塚古墳群、寺ヶ入古墳群、東山古墳群とほぼ間断なく続き、やや東に離れて焼山古墳群もある。矢場川流域には、かつて90基が存在したとされる矢場川古墳群があり、前期前方後方墳である藤本観音山古墳や、前期前方後円墳の矢場薬師塚古墳、後期前方後円墳である勢至堂裏古墳、淵ノ上古墳等もこれに含まれている。渡良瀬川左岸では、足利市街地北の丘陵部に物見古墳群、東山古墳群、西宮西古墳群、吾妻古墳群、立岩古墳群、足利公園古墳群等が存在している。

### (5) 奈良・平安時代

この時期になると、集落は広範囲で見られるようになる。金山丘陵北東部では、古墳時代後期に楽前、大道東遺跡に限られていた集落が大きく広がり、二の宮、八ヶ入、大道西、東今泉鹿島、鹿島浦、猿楽、向矢部、矢部の各遺跡から、多数の住居が検出されている。他の地域も、基本的には古墳時代後期の集落からさらに広がっている状況で、金山・八王子丘陵と渡良瀬川間の大部分で集落が見られるようになっている。これに対し、渡良瀬川左岸ではこの時代の集落も少なく、宇津木遺跡で竪穴住居が検出されている程度である。

生産遺跡については、金山丘陵において、前代に開始された須恵器生産が引き続き行われている。前述のように、7世紀末から8世紀初頭に丘陵西側に窯場が移動していると考えられているが、金山丘陵の北にある八王子丘陵南東部でも須恵器の生産が行われるようになり、丸山北窯跡などで須恵器が焼成されている。また、丸山腰巻遺跡では、丘陵ではなく台地を利用して構築された須恵器窯が検出されている。

さらにこの時期には、鉄生産も開始される。場所は少し離れるが、太田市旧藪塚本町域にある西野原遺跡では、7世紀後半から操業されたと考えられている製鉄遺構（箱型炉4基）が検出されており、八王子丘陵南東部の峯山遺跡からも8世紀前半代の製鉄炉（箱型炉3基）、鍛冶遺構、炭窯が検出されている。金山丘陵でも、北東部の菅ノ沢Ⅰ、北西部の高太郎Ⅰ・Ⅱ遺跡等で製鉄炉（竪型炉3基）や炭窯が、寺中遺跡で鍛冶遺構が検出されて

いる。また、渡良瀬川左岸でも春日遺跡から、鑄造炉の可能性のある炉が検出されている。

北関東自動車道関連の、八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦の各遺跡からは、道路遺構が検出されている。幅約13mで両側に側溝を持つもので、4遺跡間の約1kmをほぼ直線で結んでいる。上野国内で東山道駅路は、現在の碓氷峠のあたりから安中を抜け、国府推定地である前橋市元総社町付近まで直線的に進むルート(国府ルート)が推定されているが、東部では、東西に直線的にのびる古代道路が2本、発掘調査により見ついている。そのうち南側のものは、「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれており、幅約13mの規模を持ち、7世紀後半～8世紀代のものと考えられている。この道路は、西部の高崎市や玉村町で検出されている道路につながるとされ、東山道駅路であると推定されている。北側のものは、幅約12mで、「下新田ルート」と呼ばれており、延長上に佐位郡家である伊勢崎市三軒屋遺跡と新田郡家である天良七道遺跡があるため、郡家同士をつなぐ伝路であるという説や、牛堀・矢ノ原ルートが廃絶された後の東山道駅路であるという説などがある。北関東自動車道関連の道路遺構は、規模や位置から牛堀・矢ノ原ルートになる可能性が高い。これまでに確認されている金山丘陵以西のルートは、東西方向やや北向きの走向であるが、金山丘陵以東のルートは、やや南向きの走向になっており、丘陵を境に走向が変わっている。

寺院・官衙については、金山丘陵北西の寺井・天良地区から小金井・市野井にかけての地域に、古代寺院や地方官衙跡に比定される遺跡が多く存在している。この地域は、『和名抄』によれば、「新田郡」に属すと考えられ、新田郡の郡家と推定される天良七堂遺跡や、寺院跡では8世紀中葉の小規模寺院である釣堂遺跡、7世紀後半の創建と推定される寺井廃寺がある。しかしながら、当遺跡のある金山丘陵東部は「山田郡」に属すると考えられる。山田郡の郡家は金山丘陵北部の「古氷」の地であると推定されているため、当遺跡周辺は山田郡の中心地域と考えられる。郡家の存在を裏付ける遺構・遺物の見ついている遺跡はないが、北関東自動車道関連の遺跡である八ヶ入・楽前・鹿島浦・向矢部・矢部等の遺跡から三彩陶器片・軒丸瓦片・円面硯・獣脚円面硯・漆紙文書など、近隣に官衙的施設の存在を思わせる遺物が出土し

ている。

水田跡では、古氷条里制水田跡でAs-B下水田が確認されているが、畦畔が方形に走向しており、条里地割にのっていると考えられる。水田の開削時期は奈良時代後半から平安時代前半と考えられており、この時期に条里地割が導入されたことが判明してきた。

## (6) 中世以降

中世の城郭としては、金山城がある。これは金山丘陵上にある山城であり、文明元(1469)年岩松家純によって築城された。以後、享禄元(1528)年には岩松氏の重臣横瀬氏へ、さらに天正12(1584)年には後北条氏へと城主が変わっており、その間東毛地区の中心的な城として重要な役割を果たしたが、天正18(1590)年に後北条氏が滅亡した後は廃城となった。その城域は広大で、山頂部に実城を置き、山頂部から延びる西尾根に西城を、北に延びる観音山に北城を、南の中八王子山には八王子山の砦を構える、複合的城郭である。山頂部の実城域に日の池・月の池の大池を持ち、石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸など山城としては珍しい石組みの施設を有する。発掘調査は平成4(1992)年度から行われ、その結果を受けて史跡整備が行われている。

中世の城館跡については、金山城をはじめとして、萩原館跡、丸山の砦跡、矢田堀館跡、只上の砦跡、矢部城跡、国済寺城跡、市場城跡、狸ヶ入館跡、今泉城跡、東金井城跡、富田館跡、宗金寺環濠遺構、植木野城跡、本矢場城跡等が、金山丘陵北部から東部にかけて多く存在している。

中世以降の遺構の検出される遺跡については、八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦、向矢部、矢部、道原等の北関東関連遺跡を中心とした、金山丘陵北東部に多く分布している。特に、大道西遺跡では、14・15世紀を中心とした掘立柱建物群が多数検出されており、複数の屋敷地の存在が確認されている。

渡良瀬川左岸地域には中世以降の遺跡が多く、宿居館跡、山下本郷館跡、大前堀之内館跡等の居館跡や、鹿島薬師廃寺、智光寺跡、緑町廃寺、連岱寺跡、宝幢寺跡等の寺院跡が分布している。



第11図 周辺遺跡位置図(国土地理院 1:25,000 地形図「上野境」「足利南部」「桐生」「足利北部」を縮小して使用)



## II 周辺環境

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△																備考	文献				
			縄文						弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世								
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中					後							
57	八幡IV遺跡																		窯 灰原	20				
58	八幡II遺跡																		窯2基 灰原	20				
59	八幡V遺跡																		窯 灰原 円墳1基	20				
60	八幡III遺跡																		窯1基 灰原	20				
61	狸ヶ入II遺跡																		灰原 須恵器出土	44				
62	辻小屋遺跡																		須恵窯4基	1				
63	辻小屋窯跡群																		須恵窯4基	20				
64	大長谷遺跡																		須恵窯	19				
65	狸ヶ入I遺跡																		窯1基	44				
66	狸ヶ入館跡																	○	堀 土居 戸口	60				
67	今泉城跡																	○	16世紀 堀 土居	60				
68	入宿II遺跡																		灰原	20				
69	入宿I遺跡																		灰原	20				
70	入宿III遺跡																		灰原 須恵器出土	20				
71	母衣埴輪窯跡																		埴輪窯	1				
72	金井口埴輪窯跡																		埴輪窯3基以上	1				
73	聖天沢遺跡																		円墳 横穴式石室 中世墓	5				
74	丸屋敷の砦																	○						
75	西山古墳群																		終末期群集墳	1				
76	金井口古墳群																			44				
77	東金井城跡																	○	15・16世紀 堀 土居 戸口 腰郭	60				
78	亀山古墳群																		後期群集墳	1				
79	亀山京塚古墳																		後期円墳 陶棺 6世紀中	1				
80	亀山窯跡																		須恵窯2基 灰原	1				
81	金井口遺跡	△			△														埴輪窯2基 製鉄窯1基	9				
82	宿裏遺跡																		△	古墳・平安遺物散布	11			
83	下宿遺跡		○																○	○	縄文草創期土坑 古墳前期・平安集落 中世溝	10・12・13		
84	正郷遺跡																			△	古墳遺物散布	44		
85	富田館跡																		○	16世紀 堀 土居 戸口	60			
86	堂目木遺跡																		◆	●	10世紀小鍛冶 中世火葬墓	26		
87	宗金寺環濠遺構																		○	16世紀 2重の堀	60			
88	相方遺跡																		△	平安遺物散布地	1			
89	植木野城跡																		○	16世紀 堀 土居 戸口	44			
90	駒形遺跡																		○	○	古墳前期～中期集落	1・24		
91	磯之宮遺跡																		○	○	弥生中期・古墳前期・平安集落	1・25		
92	上小林稲荷山古墳																			●	中期円墳 径60m	1・25		
93	八坂神社古墳																			●		44		
94	西浦遺跡																		○	○	●	平安集落 中世墓坑	25	
95	安良岡古墳群																			●	後期群集墳	1		
96	塚本遺跡																			○	古墳集落	41		
97	原店遺跡																			△	古墳遺物散布	44		
98	塩ノ山遺跡																			●	円墳1基	1		
99	焼山北遺跡 焼山北古墳群	△	△																	△	●△	旧石器～古墳遺物包蔵地 後期円墳または帆立貝式古墳	1・2	
100	内並木古墳群																			●	円墳3基現存	1		
101	内並木遺跡	△																		△	△	旧石器包蔵地 灰原 須恵器出土	1	
102	馬塚古墳群																			●	後期群集墳	1		
103	寺ヶ入遺跡 寺ヶ入古墳群																			●	●	円墳約30基現存	1・14	
104	富士山古墳群																			●		44		
105	東山古墳群																			●		終末期群集墳	1	
106	金山城跡																			○		1469年築城 石垣・石敷き通路・石組み排水路・石組み井戸等	15・17・18	
107	高山古墳																			●		後期前方後円墳	1	
108	本陣跡																					○	礎石建物 土坑	39
109	宮内遺跡		△																	○	○	古墳前期～後期・平安集落	40	
110	浜町古墳群																			●		後期群集墳	1	
111	北田環濠遺構群																					○	堀 二つの環濠	60
112	焼山南遺跡 焼山古墳	△			△															△	△	旧石器～平安遺物包蔵地 後期前方後円墳	1・2	
113	焼山古墳群																			●		前方後円墳1基(焼山古墳) 円墳6基以上	1・2	

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△													備考	文献			
			縄文					弥生		古墳			奈良	平安	中世			近世		
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中							後	
114	細田遺跡	△			○								●				○		旧石器包蔵地 古墳前期方形周溝墓 縄文前期・平安集落	7・8
115	伊豆ノ山遺跡	△																	旧石器包蔵地	1
116	安良岡遺跡										△								古墳遺物散布	44
117	星ノ宮遺跡										△								古墳遺物散布	44
118	東長岡戸井口遺跡	△	○														○		縄文・古墳中期～平安集落 中世館跡	48
119	東長岡Ⅰ遺跡				△						△								縄文・古墳散布地	44
120	東長岡金井町遺跡		○										○						縄文土坑 古墳前期溝 奈良集落	1
121	旧太田工業高校北裏遺跡												○						古墳中期集落	4
122	溝所遺跡										△								古墳遺物散布	44
123	新堀遺跡										△								古墳遺物散布	44
124	石原二ツ山古墳											●								44
125	雷遺跡		△																縄文遺物包蔵地	59
126	大日山古墳												●						35×41mの円墳 礫礫 6世紀初	1
127	大日山古墳群											●								44
128	下小林館跡(大倉城)																○		15・16世紀 堀 土居 戸口	60
129	下小林上遺跡				○							○							縄文前期・古墳前期集落	59
130	清水田遺跡				○							○					○		古墳～平安集落	1・58
131	清水田Ⅱ遺跡												○	○	○				古墳～平安集落	1
132	登戸遺跡										△								古墳遺物散布	44
133	本矢場城跡																○		堀 土居 戸口 16世紀	60
134	相場観音経塚																	●	一字一石経塚 江戸中期か	44
135	矢場寄合遺跡										△		○	△					古墳後期集落	1
136	稲荷宮遺跡																○		平安集落	24
137	矢場氏累代の墓																●		五輪塔・宝篋印塔等の墓石群 永祿5年等の銘あり	44・45
138	矢場向遺跡												○				○		古墳前期・平安集落	1・24
139	芋の森遺跡				△				△	△							△		縄文・弥生土器・土師器・須恵器散布	1
140	里矢場温井遺跡												△						土師器・須恵器散布	1・62
141	駒形南遺跡											○		○	○				古墳前期・後期・奈良集落	1
142	里矢場上屋敷館跡																○		中世館跡 土塁現存	62
143	丹波倉遺跡 杉原遺跡											△	△		△			△	古墳中期土師器出土	1・62
144	矢場川古墳群												●						約90基存在したか 現存数基	1・62
145	矢場兼師塚古墳												●						前期前方後円墳 全長80m 4世紀代か	1
146	鶴巻山古墳												●						前期前方後方墳 全長43m 4世紀後半	1
147	上宿古墳(勢至堂裏古墳)													●					前方後円墳 6世紀前半か 全長45m	1・68
148	淵ノ上古墳													●					後期前方後円墳 全長64m	1
149	矢場川城跡																○		中世城郭 矢場国隆が築城か	62
150	新宿遺跡		△									△							土師器・須恵器・埴輪散布	62
151	藤本観音山古墳												●						前期前方後方墳 全長117.8m 4世紀中葉か	77
152	堀込新田遺跡													△					土師器・須恵器散布	62
153	堀込宮前遺跡																△		土師器散布	62
154	大将陣跡																	○	伝源義家陣跡 遺構・遺物なし	62
155	南大町遺跡												●		○	○			古墳後期・古代集落 古墳前期方形周溝遺構確認	1・62・76
156	南大町古墳群												●						現存なし 8基ほど存在したか	62
157	八幡山古墳群													●					円墳71基現存 直刀・金環・切子玉・埴輪等出土	62・75・78
158	八幡山遺跡				△														縄文・弥生土器散布	62
159	八幡八幡宮																○	○	神社跡 江戸後期社殿現存 土塁	62・74
160	神宮寺跡																○		八幡八幡宮の別当寺院 現在は廃寺	62
161	古河堤跡																	○	近世渡良瀬川堤防	62
162	水道山・足利公園古墳群													●					後期群集墳 16基以上存在か	64・65・66・67・68・78
163	緑町庵寺																○		寺院跡 現在は宅地化	62
164	連岱寺跡																○		中世寺院跡	62
165	足利公園遺跡				△														縄文土器・石器散布	62
166	宝幢寺跡																○		寺院跡 溝検出 近世瓦出土	62・65
167	立岩遺跡				△					△		△							縄文土器が主に散布	62
168	立岩古墳群												●						円墳7基現存	62
169	吾妻古墳群												●						円墳7基現存	62
170	東山古墳群												●						円墳7基現存	62
171	物見古墳群												●						円墳13基現存	62

## II 周辺環境

番号	遺跡名	旧石器	集落・溝等○墳墓●生産跡◆水田・畠■遺物のみ△													備考	文献					
			縄文					弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世							
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前							中	後			
172	中堀古墳群													●						円墳1基現存	62	
173	西山古墳群													●							円墳1基現存	62
174	丹南藩五十部陣屋跡																		○		近世岡田家陣屋跡	62
175	中山古墳群													●							円墳3基現存	62
176	離山遺跡				△																縄文土器散布	62
177	山前駅遺跡												△								土師器散布	62
178	鹿島薬師庵寺																	○	○		寺院跡 中世瓦・須恵器・板碑等出土	62
179	山下台遺跡												△						△		土師器・中近世土器散布	62
180	山下本郷館跡																	○			中世館跡 堀・土塁現存	62
181	春日岡古墳群													●							方墳1基・円墳7基現存	62
182	春日遺跡				○									●		◆		○	○		縄文前期集落・古墳・古代鋳造炉等検出	70
183	山王遺跡				△														△		縄文・古墳～平安・中近世の遺物散布	62
184	智光寺跡																	○			中世寺院跡 基壇・礎石建物検出	71
185	平石遺跡	△	○																		縄文草創期～前期遺物出土 撚糸文系土器多数	64・69・72・78
185	平石古墳群													●							円墳3基現存	62
186	大平古墳群													●							17基現存	62
187	宿居館跡			△	○	△	△	△										○	○		縄文前期土坑 撚糸文系土器 中世後半居館跡	73
188	宿古墳群													●							円墳2基現存	62
189	大前堀之内館跡																	○			中世館跡 小此木備中守の居館か	79
190	東台遺跡				△																縄文土器・土師器・埴輪散布	62
191	台山遺跡				△																縄文土器散布	62
192	宇津木遺跡													△				○	○		奈良平安集落 中世堀検出	66
193	大前西山遺跡				△					△											縄文・弥生土器散布	69
194	大前坂遺跡				△																縄文土器散布	62
195	上山古墳群													●							3基現存	62

### 参考文献

- 1 太田市1996『太田市史 通史編 原始古代』
- 2 はにわの会1968『焼山遺跡総合調査報告』
- 3 日本考古学会1970『考古学雑誌』56巻3号
- 4 太田市教育委員会1972『太田工業高等学校北東遺跡発掘調査報告書』
- 5 太田市教育委員会1972『聖天沢遺跡調査報告書』
- 6 駒沢大学考古学研究会1978『管ノ沢遺跡・巖穴山古墳調査概報』
- 7 太田市教育委員会1978『細田遺跡発掘調査概報』
- 8 太田市教育委員会1979『細田遺跡発掘調査略報Ⅱ』
- 9 太田市教育委員会1979『金井口遺跡発掘調査略報-第2次調査-』
- 10 太田市教育委員会1985『下宿遺跡発掘調査概報』
- 11 太田市教育委員会1986『下宿遺跡-宿裏地区-』
- 12 太田市教育委員会1987『下宿遺跡E地点』
- 13 太田市教育委員会1988『下宿遺跡F地点』
- 14 太田市教育委員会1992『寺ヶ入遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』
- 15 太田市教育委員会1994『金山城跡 大手道発掘調査』H6年3月
- 16 太田市教育委員会1997『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』
- 17 太田市教育委員会1997『金山城跡・月ノ池』
- 18 太田市教育委員会2001『史跡金山城跡環境整備報告書発掘調査編』
- 19 太田市教育委員会2002『長手谷遺跡群発掘調査報告書』
- 20 駒澤大学考古学研究会2007『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅰ』
- 21 駒澤大学考古学研究会2009『群馬・金山丘陵遺跡群Ⅱ』
- 22 群馬県教育委員会1983『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 23 群馬県教育委員会1984『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 24 太田市教育委員会1985『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 25 太田市教育委員会1986『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 26 太田市教育委員会1987『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 27 太田市教育委員会1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 28 太田市教育委員会1989 3月28日『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 29 太田市教育委員会1989 3月31日『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 30 太田市教育委員会1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
- 31 太田市教育委員会1994『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-案前遺跡-』
- 32 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅱ次農政分)-』
- 33 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅱ次文化庁分)-』
- 34 太田市教育委員会1997『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅲ次農政分)-』
- 35 太田市教育委員会1997『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-向矢部遺跡(第Ⅲ次文化庁分)-』
- 36 太田市教育委員会2000『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報-丸山腰巻遺跡-』
- 37 太田市教育委員会1993『市内遺跡Ⅺ』
- 38 太田市教育委員会1997『市内遺跡ⅩⅢ』
- 39 太田市教育委員会2003『市内遺跡ⅩⅨ』
- 40 太田市教育委員会2005『市内遺跡21(第Ⅱ次)』
- 41 太田市教育委員会1992『埋蔵文化財発掘調査年報2』
- 42 太田市教育委員会1993『埋蔵文化財発掘調査年報3』
- 43 太田市教育委員会1994『埋蔵文化財発掘調査年報4』
- 44 太田市教育委員会2006『太田市の遺跡地図』
- 45 太田市H P太田の文化財恵林寺矢場氏墓石群
- 46 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『年報24』
- 47 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『年報25』
- 48 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『東長岡戸井口遺跡』
- 49 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『矢部遺跡・新島遺跡』
- 50 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『向矢部遺跡』
- 51 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『東今泉鹿島遺跡』
- 52 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『案前遺跡(1)』 2010『案前遺跡(2)』
- 53 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『古氷条里水田跡・二の宮遺跡』
- 54 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『大道西遺跡』
- 55 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『大道東遺跡(1)』 2010『大道東遺跡(2)』 2010『大道東遺跡(3)』
- 56 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『鹿島浦遺跡』
- 57 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『八ヶ入遺跡Ⅰ』 2010『八ヶ入遺跡Ⅱ』
- 58 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1985『太田東部遺跡群』
- 59 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1980『庚塚・上・雷遺跡』
- 60 群馬県教育委員会1989『群馬県の中世城館跡』
- 61 群馬県文化情報システムWEB版
- 62 足利市教育委員会1988『足利市遺跡地図』
- 63 足利市教育委員会1989『昭和62年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 64 足利市教育委員会1992『平成2年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 65 足利市教育委員会1993『平成3年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 66 足利市教育委員会1994『平成4年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 67 足利市教育委員会1995『平成5年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 68 足利市教育委員会1996『平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報』
- 69 足利市教育委員会1998『平成8年度文化財保護年報』
- 70 足利市教育委員会1977『春日遺跡第1次発掘調査報告書』
- 71 足利市教育委員会2000『智光寺跡第2次発掘調査報告書』
- 72 毛野古文化研究所1973『平石遺跡』
- 73 足利市教育委員会2001『宿居館跡発掘調査報告書』
- 74 足利市教育委員会1983『八幡八幡宮土塁発掘調査報告書』
- 75 足利市教育委員会1986『八幡山古墳群山辺小学校裏第4号墳発掘調査報告書』
- 76 足利市教育委員会1999『南大町遺跡第1次発掘調査報告書』
- 77 足利市教育委員会2005『藤本観音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』
- 78 栃木県教育委員会1981『栃木県史資料編考古Ⅱ』
- 79 栃木県教育委員会1982『栃木県の中世城館跡』

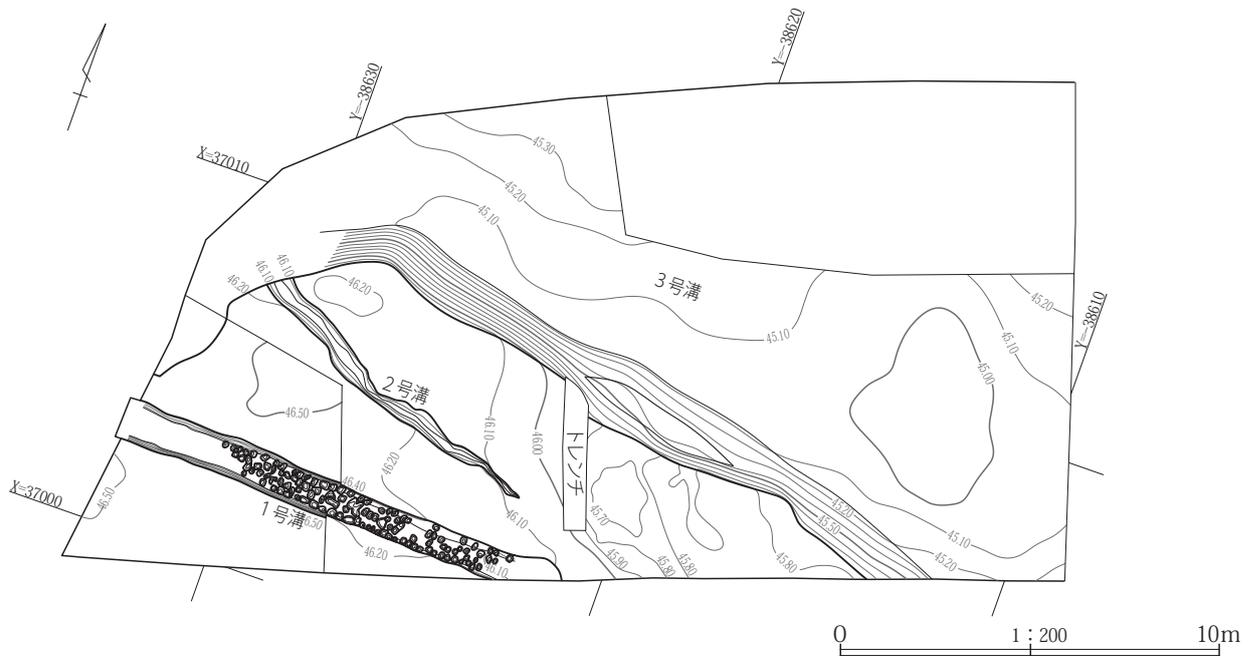
### Ⅲ 検出された遺構と出土遺物

新島遺跡は、縄文時代から近現代にかけての遺構、遺物が検出されている。遺構確認面は、1区で4面、2区で1面であるが、おおむね1区の1面は中世以降、2面は古墳時代後期～平安時代、3面は古墳時代中期以前、4面は縄文時代となっている。遺構としては、溝5条、畠1面、土坑3基、ピット7基等が検出されている。2区は1面確認されただけである。以下時代の新しいものから順に記述することにする。

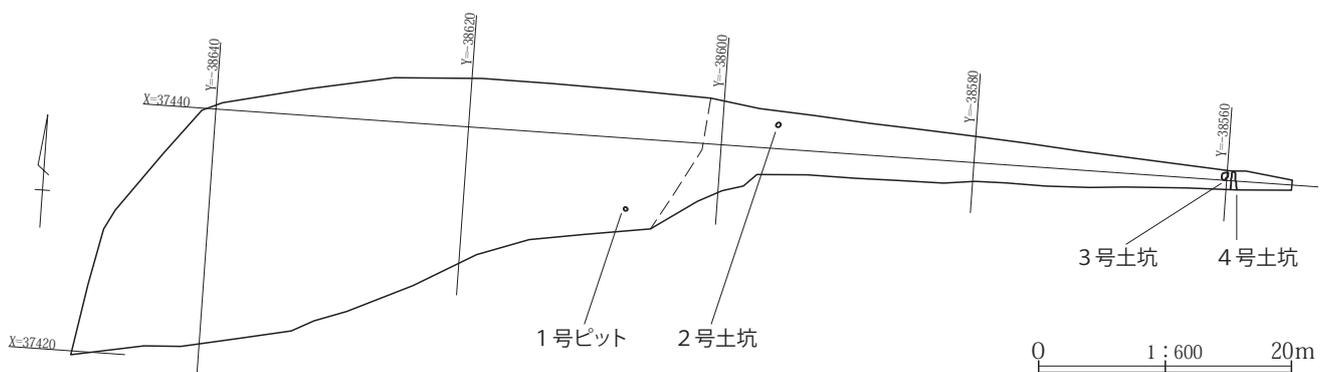
#### 1 中世以降

##### (1) 概要

中世以降の遺構は、溝3条、土坑3基、ピット1基であるが、溝はすべて1区にあり、土坑・ピットはすべて2区に存在する。溝1条（3号溝）は、渡良瀬川の旧流路と推定されている、矢場川の旧河道であると考えられる。出土遺物は、中世陶磁器・土器が14点、近世陶磁器・土器が20点、時期不詳が9点、石製品が1点、銭貨が21点で、当遺跡で遺物が最も多い時代となっている。



第12図 1区中世以降全体図(1/200)



第13図 2区中世以降全体図(1/600)

### Ⅲ 検出された遺構と出土遺物

#### 溝 (第15～17図・PL. 4)

溝は1～3号溝の3条検出されているが、3号溝は矢場川の旧河道と考えられる。

- ①分布 すべて1区西部に存在する。
- ②規模 旧河道の3号溝を除いた2条でみると、長さ12.36～12.23m平均12.30m、最大幅2.46～1.14m平均1.80m、最小幅2.18～0.78m平均1.48m、深さ48～43cm平均45.5cmである。走向は、1号溝がほぼ東西方向で、2号溝・3号溝は東部がやや南に振れている。底面の勾配は1・2号溝ともほぼ水平であるが、1号溝は東端部が西端部より4cm低く、2号溝は東端部が西端部より4cm高くなっている。周囲の地形を見ると、西から東に向かいやや下がっているため、1号溝は地形と同じ方向に傾斜し、2号溝は、やや斜めではあるが、地形とは逆の方向に傾斜していることになる。
- ③機能・時期 1号溝は底部に長径11～48cm、深さ1～8cmの小ピットが多数存在している。小ピットの形状は、楕円形・隅丸長方形で、斜めに掘られているものも多いため、掘削時の工具痕がそのまま残った可能性もある。風化・侵食の痕跡があまり見られず、掘削後短期間で埋没したと考えられるが、水路や区画の溝とすることは困難であり、詳細な性格は不明である。2号溝も削平により残存部分が少ないため、詳細は不明であるが、底面の傾斜がほとんどないため、水路の

可能性は低い。3号溝は矢場川の旧河道であると考えられる。いずれの溝も出土遺物が少なく、確認面から中世から近世にかけてのものであること以外は、詳細な時期は不明である。

- ④出土遺物 非常に少なく、2号溝から近世在地系土器の皿1点と、3号溝から時期不詳の土器類6点が出土しているが、いずれも破片で埋土中の出土であり、遺構の時期を示すかどうか不明である。

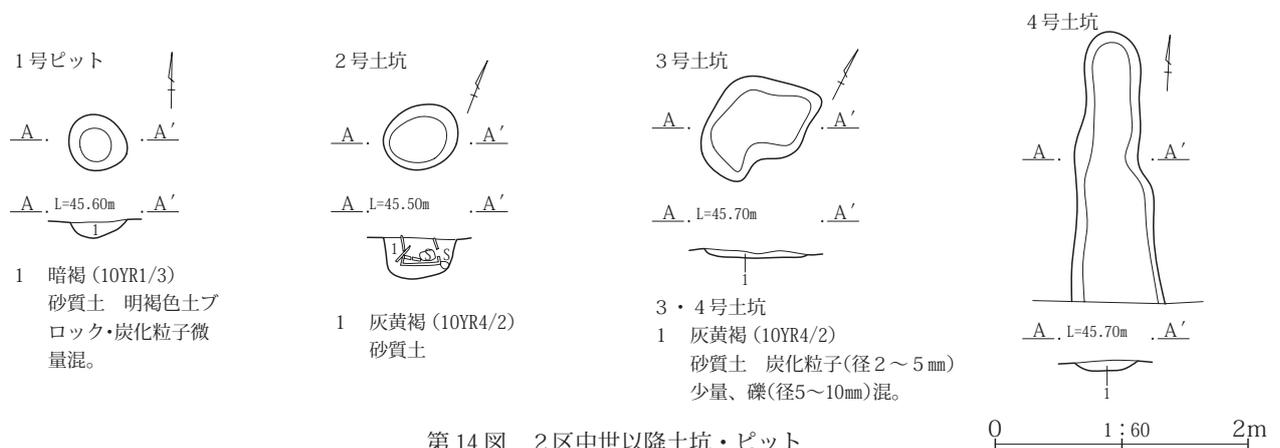
#### 土坑・ピット (第14図)

土坑・ピットは規模の違いで名称を分けているが、形態・機能等に差はないため、ここでは同じ分類とする。すべて2区から検出されている。

- ①分布 2区中央部から2基、東端部から2基検出されている。
- ②形態・規模 形態は、円形1基、楕円形1基、不整形1基、溝状に長いもの1基である。長径1.44～0.32m平均0.71m、短径0.49～0.30m平均0.40m、長径/短径2.94～1.07m平均1.88m、深さ23～6cm平均12.5cmである。
- ③機能・時期 2号土坑は近代以降の骨壺が出土しており、火葬墓と考えられる。他は出土遺物もなく浅いため、性格は不明である。
- ④出土遺物 2号土坑以外出土遺物はない。

第2表 中世以降溝一覧表

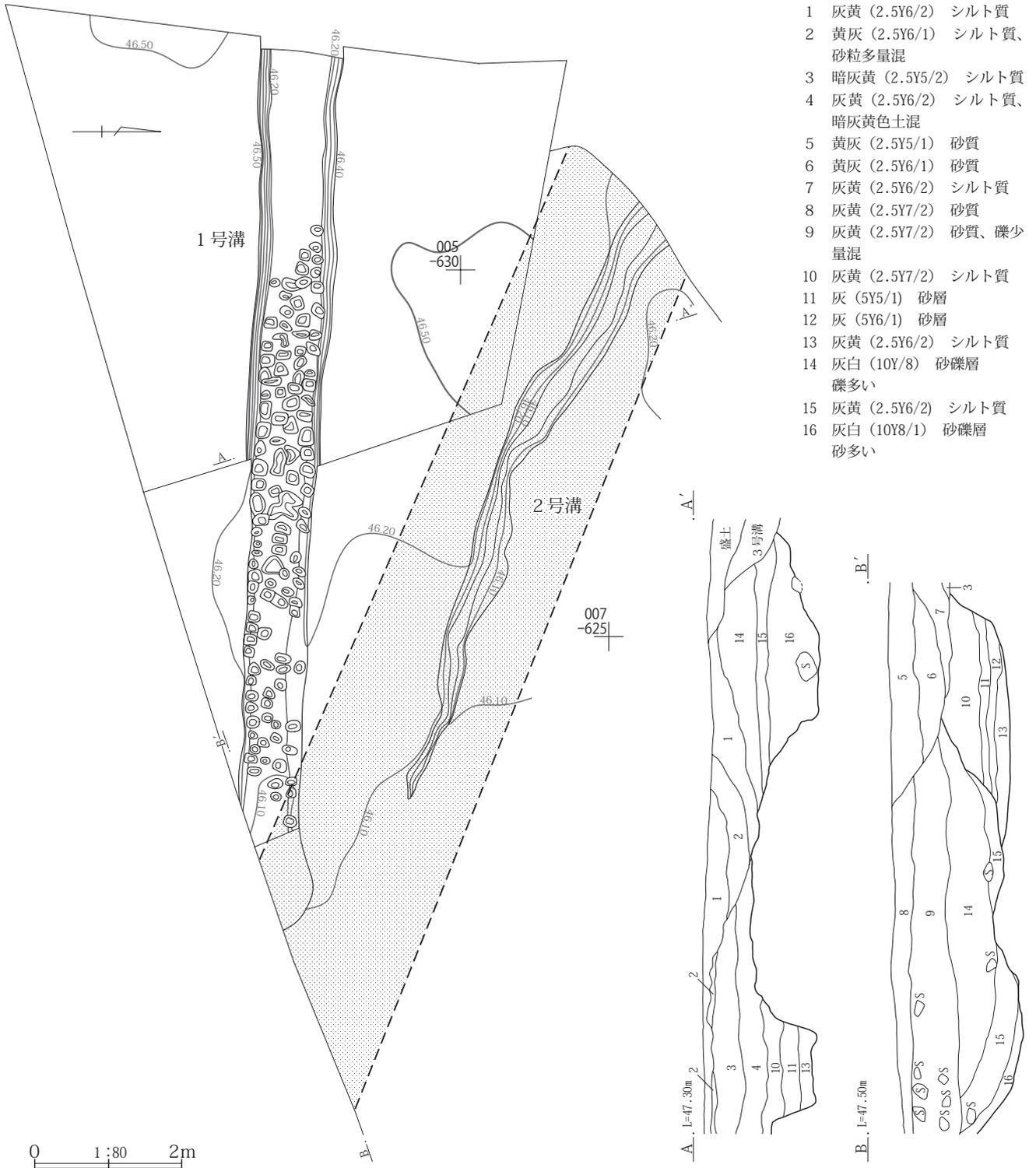
区	遺構名	位置 (Gr)	重複	長さ m	最大幅 m	最小幅 m	深さ cm	走向	備考
1	1号溝	001～003 - 620～633	2溝より古、1畠より新	12.36	1.14	0.78	48	N-87°-W	底面に多数の小ピットあり
1	2号溝	002～008 - 618～631	3溝より古、1溝・1畠より新	12.23	2.46	2.18	43	N-68°-W	
1	3号溝	004～019 - 613～632	2・4・5溝・1畠より新	[24.52]	[14.25]	[0.10]	113	N-72°-W	矢場川の旧河道か



第14図 2区中世以降土坑・ピット

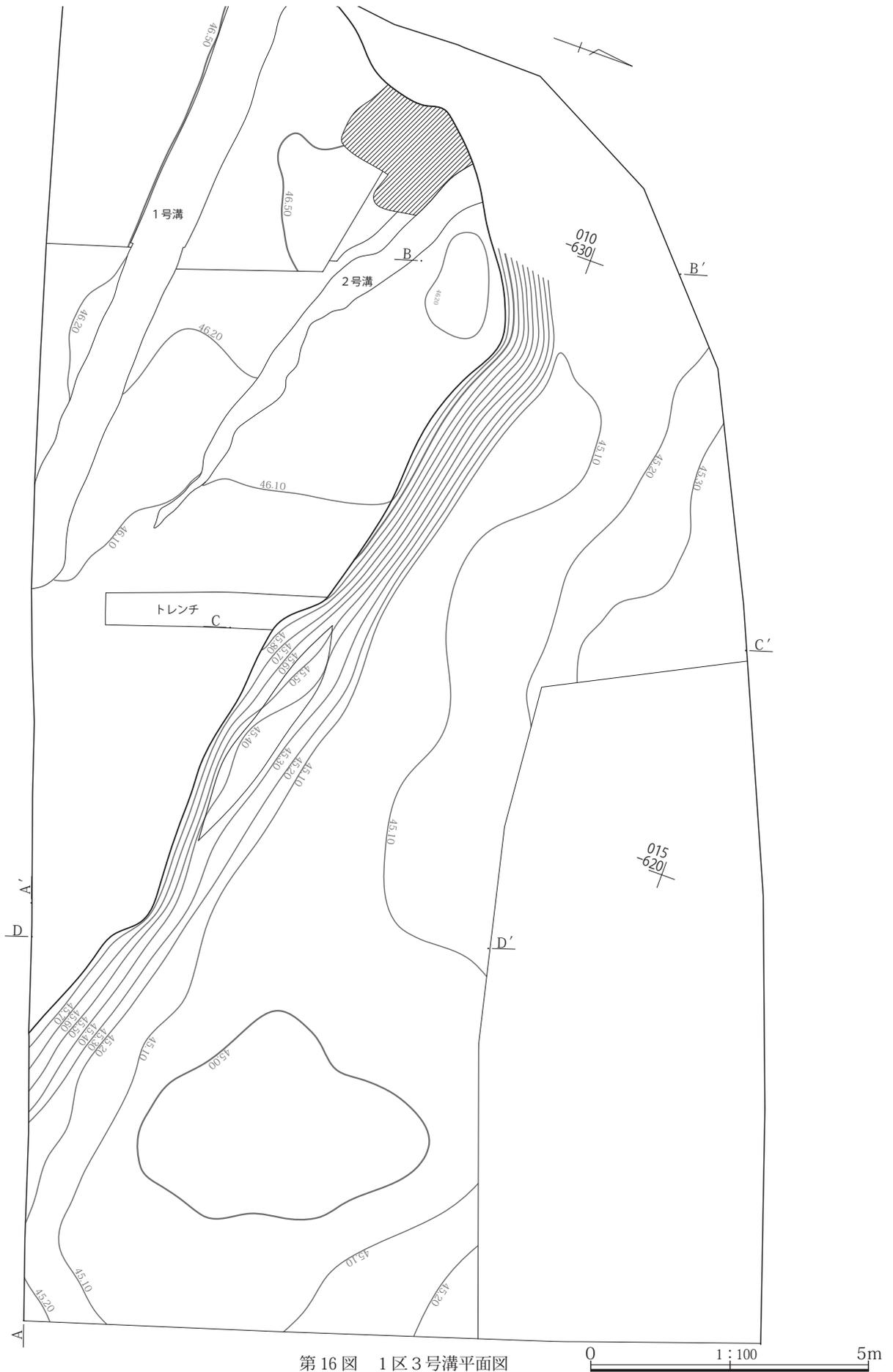
第3表 中世以降土坑・ピット一覧表

区	遺構名	位置 (Gr)	重複	平面形態	長径 m	短径 m	長径/短径	深さ cm	面積 m <sup>2</sup>	主軸方位	備考
2	1号ピット	434 - 607		円形	0.32	0.30	1.07	9	0.07	N-56°-W	
2	2号土坑	441・442 - 595		楕円形	0.40	0.33	1.21	23	0.10	N-57°-E	
2	3号土坑	440 - 559・560		不正形	0.69	0.48	1.44	6	0.23	N-35°-E	
2	4号土坑	439・440 - 559		溝状	1.44	0.49	2.94	12	0.51	N-3°-W	

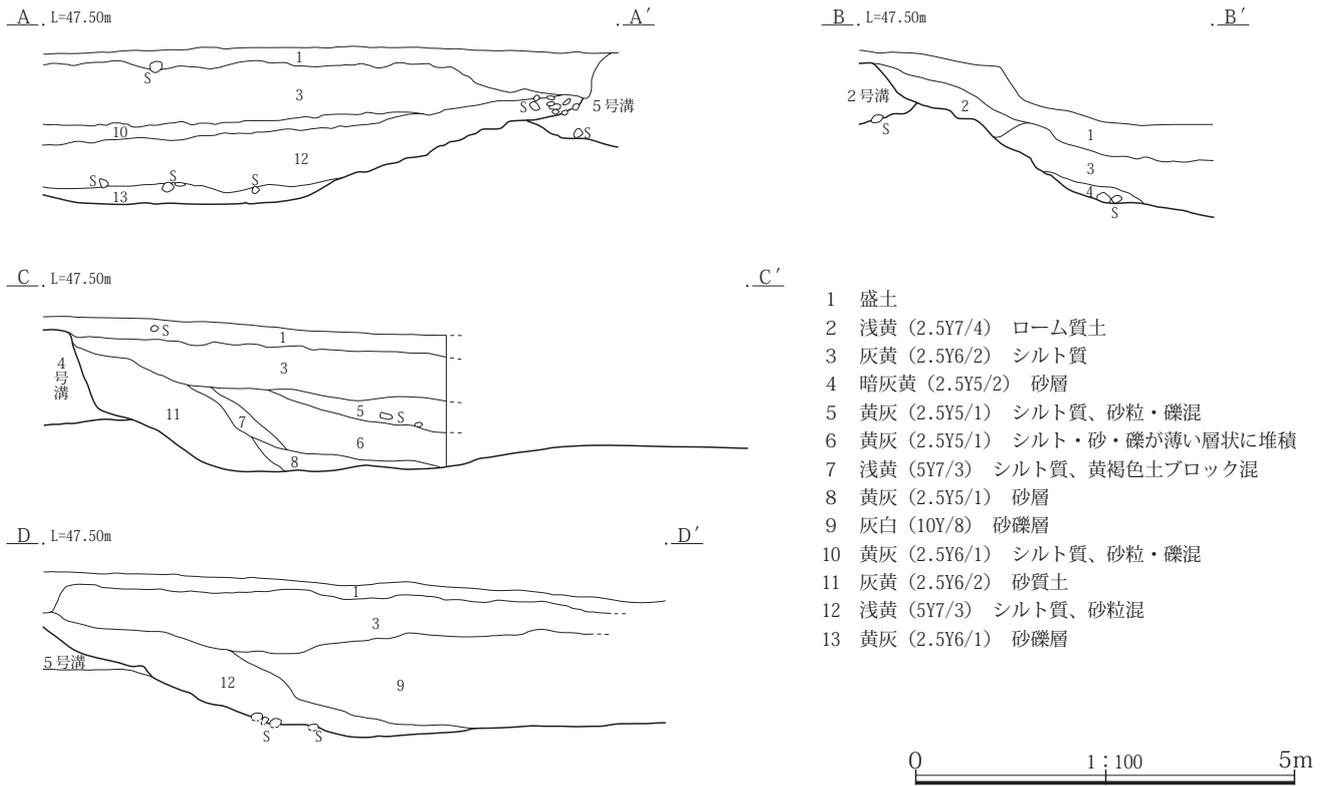


第15図 1区1・2号溝

III 検出された遺構と出土遺物



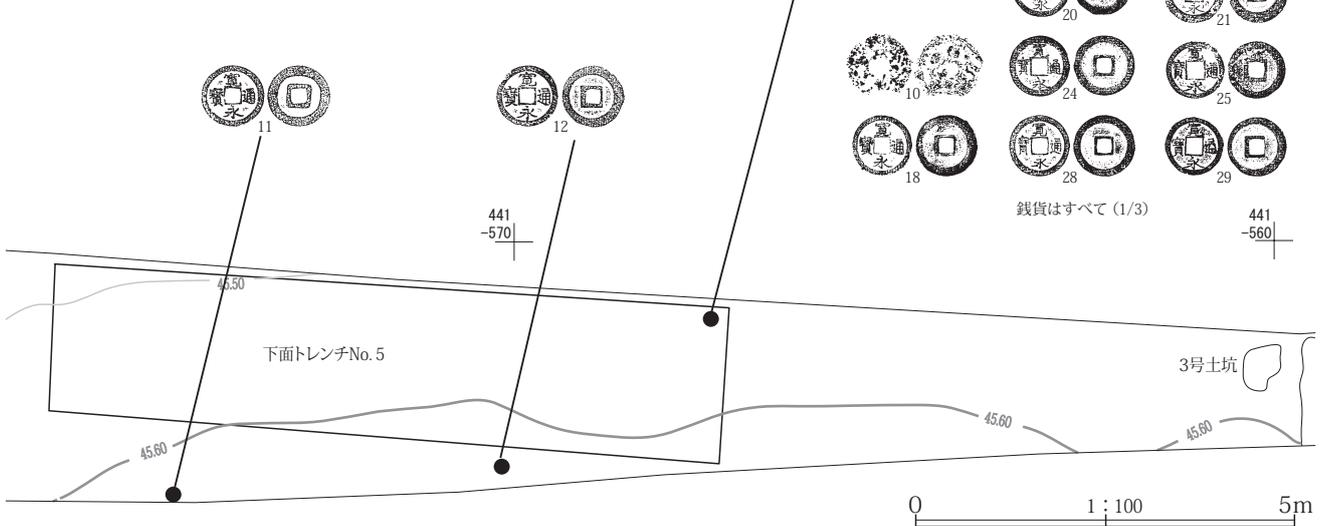
第16図 1区3号溝平面図



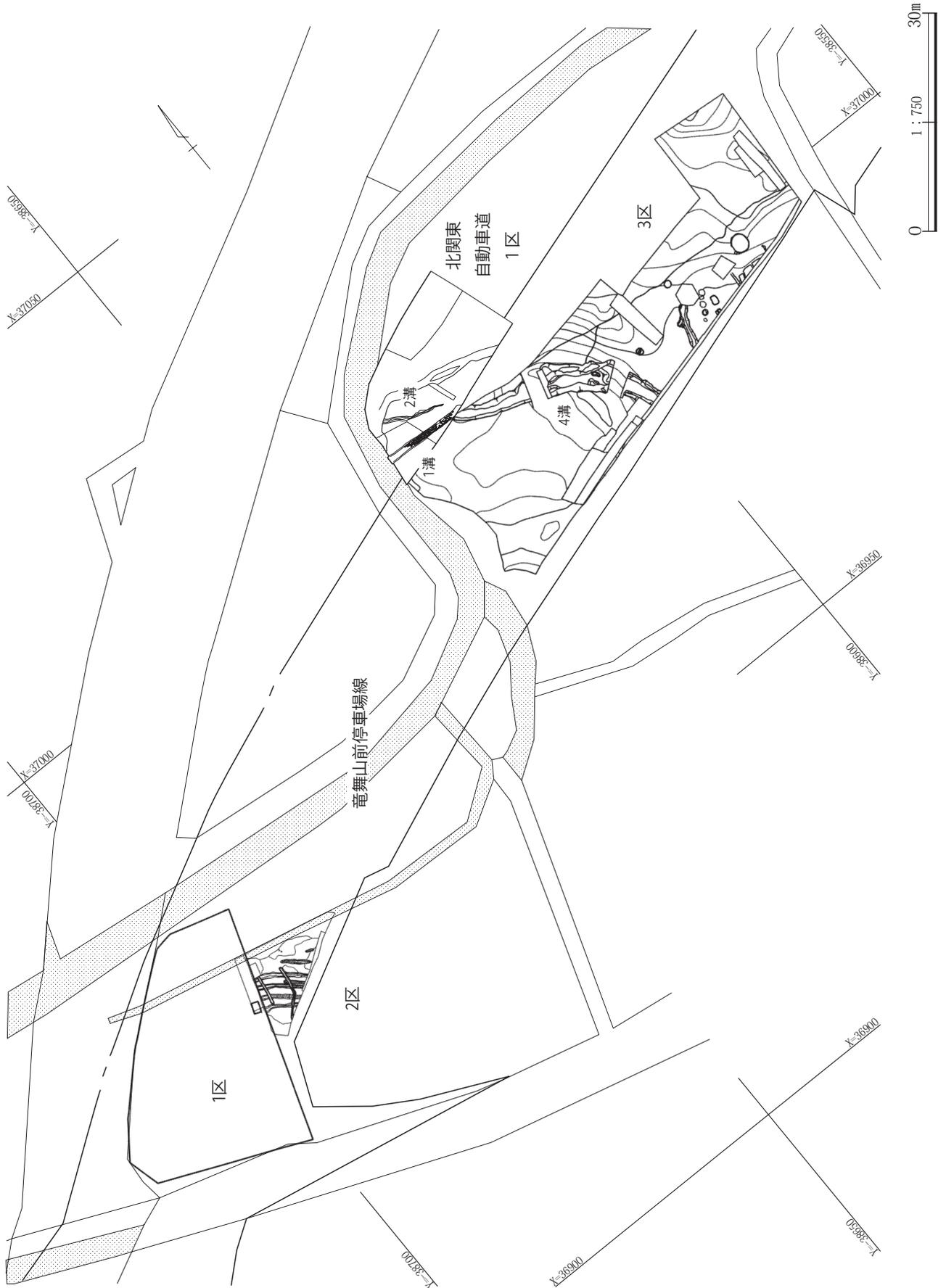
第17図 1区3号溝断面図

(2) 遺構外遺物出土状況

明確な遺構に伴わないものであるが、在地系土器の骨壺1点と銅銭2点が2区の東端部から出土している。銅銭は5トレンチ内と骨壺内からも出土しており、近隣に何らかの遺構があった可能性も考えられる。骨壺内からは、火葬人骨、寛永通宝銅銭15枚、銭種不明鉄銭2枚が出土している。



第18図 2区東端部遺物出土状況



第 19 図 1 面竜舞山前停車場線新島遺跡合成図

(3) 遺物 (観察表 第5~7表、PL. 5・6)

遺物は、第4表に示した中世陶磁器・土器、近世陶磁器・土器や石製品、銭貨等が出土している。

**陶磁器土器類** 中世国産陶器、近世中国陶磁器、国産陶磁器、在地系土器が出土している。

中世では、国産の焼締陶器である常滑陶器が1点出土しているが、これは近世の可能性もあるものである。在地系土器では片口鉢・内耳鍋類が13点出土している。遺構出土物はなく、いずれも遺構外の出土である。

近世では、陶磁器類で、中国産の陶器が3点、磁器が7点出土し、国産では、磁器が3点、施釉陶器が3点、焼締陶器が1点出土している。在地系土器は、焙烙・鍋が1点、皿(かわらけ)が5点、焜炉・火鉢類が1点、壺が1点出土している。溝・土坑から在地系土器の皿が1点ずつ出土しているが、他は遺構外の出土である。

この他に時期不詳の焙烙・鍋類が、3号溝から6点、遺構外で3点、計9点出土している。

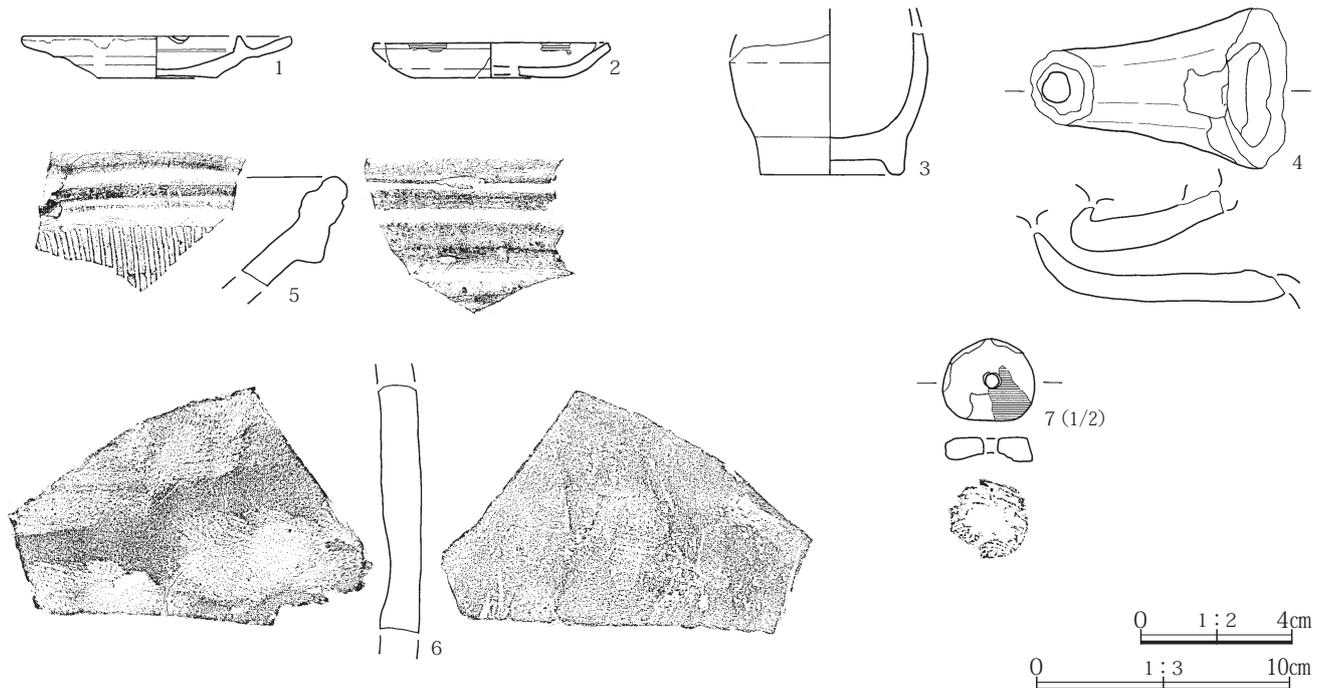
**石製品** 五輪塔空風輪が1点出土している。遺構外の出土である。

**銭貨** 鉄銭と銅銭が出土している。鉄銭は2点出土しているが1点は破損し復元不能である。いずれも440-560Gr出土の骨壺内から出土している。銅銭はすべて寛永通宝で19点出土している。このうち、15点は440-560Gr出土の骨壺内からの出土である。古寛永と新寛永では、それぞれ10点・9点とほぼ同数となっている。骨壺内のものも含めてすべての銭貨が、2区東端部440-560~570Gr 下面5トレンチ付近に集中している。

第4表 中近世出土陶磁器・土器類数量表

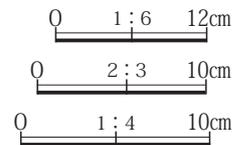
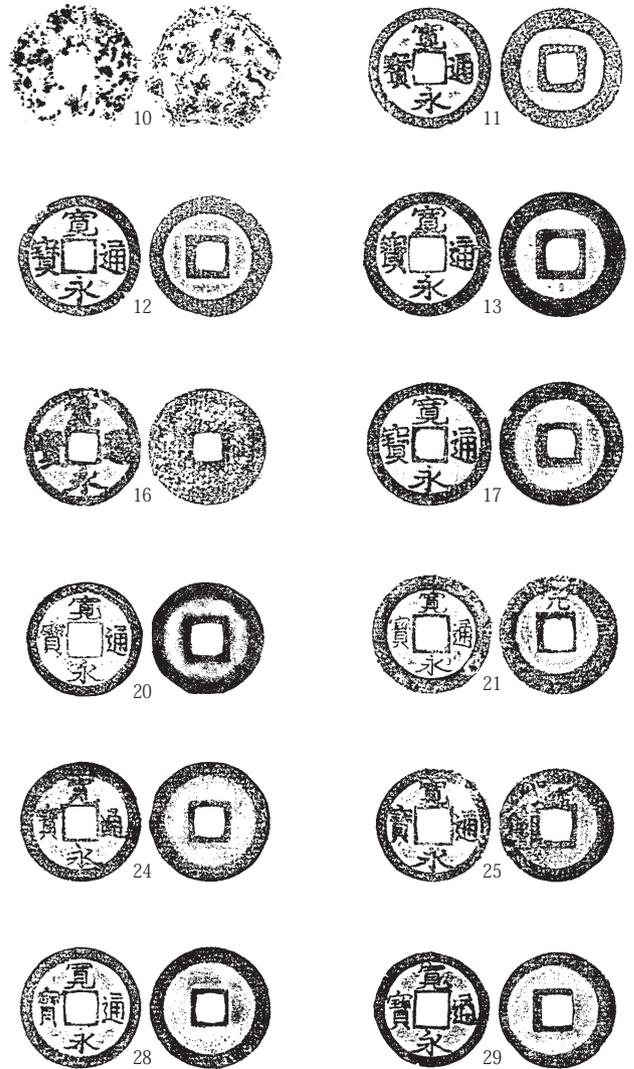
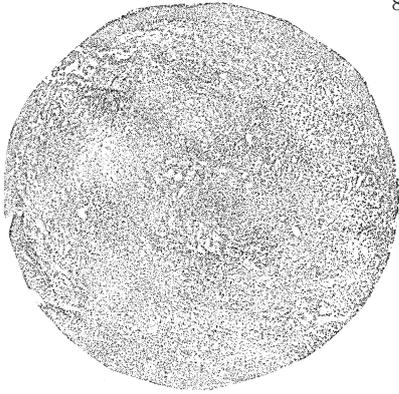
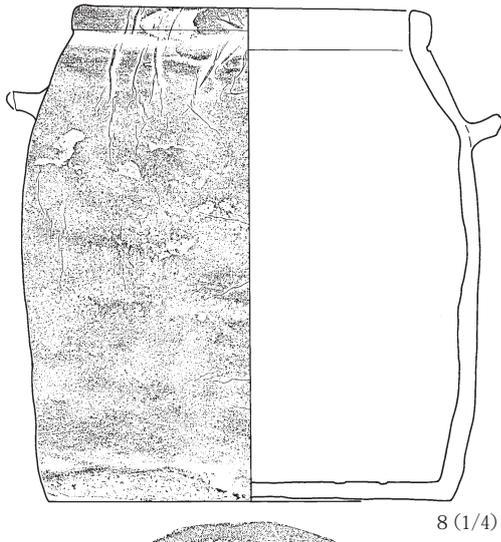
区	遺構	時代	中世						近世						不詳	計			
			A		B		C		A		B		C						
		種別	1	2	1	2	3	1	2	1	2	3	1	2	3	4	1		
1	2号溝														1			1	
1	3号溝																6	6	
1	4土坑													1				1	
1	000-610Gr									1								1	
1	000-620Gr							1						1		1		3	
1	1-2G				1			1	1					2				5	
1	1-4G																	0	
2	トレンチ1																	0	
2	440-560Gr															1		1	
	表採				1	12		2	5	2	3	1	1	1			2	30	
	計		0	0	1	13	0	0	3	7	3	3	1	1	5	1	1	9	48

※中世 A 中国陶磁器  
 B 国産陶器 1 施釉陶器 2 焼締陶器  
 C 在地系土器 1 片口鉢・内耳鍋類 2 皿(かわらけ) 3 その他  
 近世 A 中国陶磁器 1 陶器 2 磁器  
 B 国産陶磁器 1 磁器 2 施釉陶器 3 焼締陶器  
 C 在地系土器 1 焙烙・鍋類 2 皿(かわらけ) 3 焜炉・火鉢類  
 4 壺  
 時期不詳 A 土器類 1 焙烙・鍋類



第20図 中近世出土遺物1 陶磁器・土器

III 検出された遺構と出土遺物



※錢貨はすべて 2/3

第 21 図 中近世出土遺物 2 土器・石製品・鉄銭・銅銭

第5表 中近世陶磁器・土器観察表(第20・21図、PL.5)

No	種別	器形	区	出土位置	口径(長)cm	底径(幅)cm	器高(厚)cm	残存	色調	形・成調整等	備考
1	製作地不詳陶器	灯火受皿	2	表採	10.4	4.6	1.6	ほぼ完形	灰黄	外面回転篋削りだが、轆轤目の深い体部中位のみの残り残す。内面灰釉。受け部1箇所「U」字状に抉る。外面の一部油付着。	近世、近現代
2	志戸呂?陶器	灯火皿	2	表採	(9.1)	(6.0)	1.3	1/4	灰色	底部外面回転糸切無調整。内面から体部外面錆釉。口縁部油付着。	近世
3	肥前磁器	青磁瓶	2	表採	-	5.5	-	底部	白	外面から底部内面青磁釉。高台端部無釉。	近世
4	製作地不詳陶器	カンテラ	2	表採	-	-	-	体部	橙	土器素地の外面から火皿部分に透明釉をかけた軟質施釉陶器。油を入れる本体との接合部で剥がれる。上面は釣り手が接合部から剥がれる。	置くかつり下げる
5	堺・明石陶器	すり鉢	2	表採	-	-	-	口縁部片	明赤褐色	口縁部厚く、内面に段を有する。外面口縁部下回転篋削り。	近世末 堺
6	常滑陶器	常滑	2	表採	-	-	-	体部片	橙	外面丁寧な撫で。内面も紐作り痕ほとんど撫で消す。	中世もしくは近世
7	在地系土器	円盤状二次加工品	2	表採	2.3	2.1	0.6	底部	浅黄	底部外面回転糸切無調整で、皿底部片を円盤状に加工。中央は内面側から穿孔したようで、底部外面側の孔周囲には細かい器表の剥がれが認められる。一部油付着。	二次利用品
8	在地系土器	壺	2	440-560Gr	18.7	21.2	26.1	完形	浅黄、器表暗灰から黒	燻し焼成。底部外面から体部外面下端型肌残る。内外面横撫でで、口縁部は丁寧な横撫で。肩部に2箇所取っ手貼付。底部内面の2箇所に鉄錆付着。	近世、近現代

第6表 中近世石製品観察表(第21図、PL.5)

No	区	出土位置	器種	形態	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	製作状況	備考
9	2	表採	五輪塔	空風輪	26.4	15.0	11.4	6500	角閃石安山岩	形状は均質、偏平。括れ部は上端側で浅く、風輪側で強く括れ丁寧に磨かれる。空・風輪体部には縦位工具痕を残す。臍は欠損後再加工され、底面は平坦。	

第7表 中近世銭貨観察表(第21図、PL.5・6)

No.	種類	銭種	出土位置	残存状態	径cm	孔cm	厚cm	重量g	分類	摘要
10	鉄銭	不明	440-560Gr出土壺内	一部欠損	2.4×2.6	0.6	0.2	2.9	I	錆が激しい
11	銅銭	寛永通宝	430-560Gr	完形	2.4	0.6	0.1	2.6	II-A	背文なし
12	銅銭	寛永通宝	430-560Gr	完形	2.5	0.5	0.1	2.6	II-A	背文なし
13	銅銭	寛永通宝	5トレンチ内	完形	2.5	0.7	0.1	3.2	II-A	背、孔下位に点あり。
14	銅銭	寛永通宝	5トレンチ内	完形	2.5	0.6	0.1	3.5	II-A	背文なし
15	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.5	0.6	0.1	2.9	II-A	背文なし
16	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.5	0.1	3.2	II-A	背文なし
17	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.5	0.6	0.1	2.9	II-A	背文なし
18	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.6	0.1	2.7	II-A	背文なし
19	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.5	0.6	0.1	3.2	II-A	背文なし
20	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.6	0.1	1.9	II-B	背文なし
21	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.6	0.1	2.8	II-B	背、孔上位に「元」。
22	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.6	0.1	2.6	II-B	背文なし
23	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.6	0.1	2.9	II-B	背文なし
24	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.6	0.1	3.3	II-B	背文なし
25	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.6	0.1	2.9	II-B	背文なし
26	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.7	0.1	2.3	II-B	背文なし
27	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.6	0.1	2.5	II-B	背文なし
28	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.4	0.6	0.1	3.9	II-B	背文なし
29	銅銭	寛永通宝	440-560Gr出土壺内	完形	2.3	0.6	0.1	2.9	II-B	背文なし

## 2 古墳時代後期～平安時代



第22図 1区2面全体図

### (1) 概要

古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物は、1区2面で検出されている。遺構は溝が2条、畠が1面検出されており、遺物は土師器、須恵器が70点出土している。2区からは、この時代の遺構・遺物は検出されていない。

### (2) 遺構

#### 溝 (第23図)

溝は4・5号溝の2条が検出されている。

- ①分布 1区中央南部に2条並んで存在する。
- ②規模・走向等 現存する範囲内で、最大幅が3.06～2.62m、最小幅が2.02～1.42m、深さが51～15cmである。4・5号溝とも走向は、北から南東に向かっていく。底面の勾配は、両溝ともほぼ水平で、溝の両端で高低差は見られない。周囲の地形は、南西から北東に向かって下がっているが、溝はその等高線に沿うように存在している。
- ③機能・時期 4号溝は、竜舞山前停車場線新島遺跡の5号溝に続くと考えられるが、同溝は用水路と考えられている。北関東自動車道5号溝も、4号溝に並行しており、同様な性格の溝と考えられるが、残存部が少ないため、詳細は不明である。

出土遺物が少なく時期を限定することは難しいが、4号溝からは平安時代の須恵器が出土しているため、この時代まで下る可能性がある。また、竜舞山前停車場線新島遺跡との関係からも9世紀代となる可能性が高い。(第V章参照)

- ④出土遺物 4号溝埋土中から、土師器杯・甕、須恵器杯・甕等が出土している。5号溝からの出土遺物はなかった。

#### 畠 (第24図・PL. 4)

畠は1面検出されている。

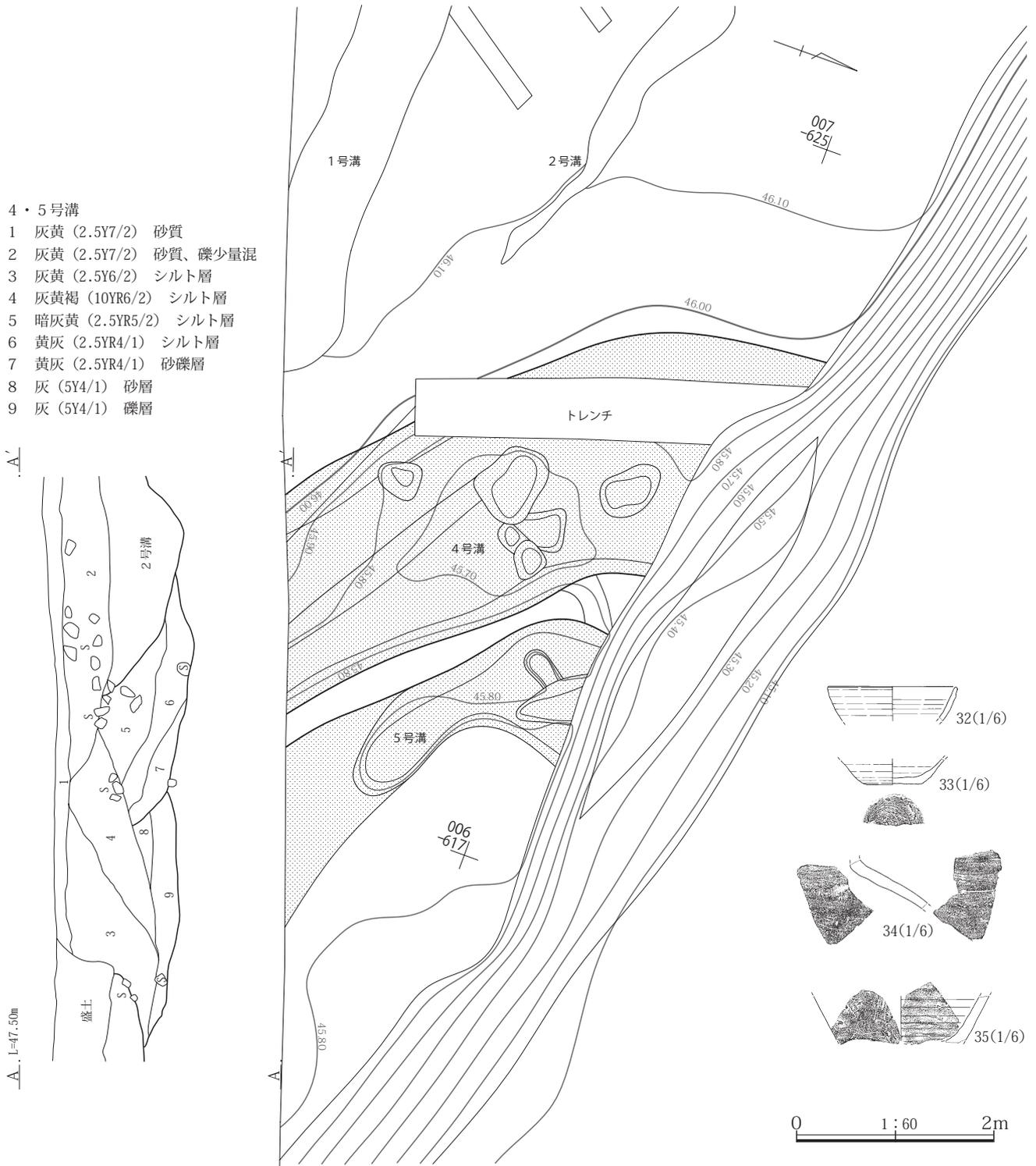
- ①位置 1区南部に存在する。
- ②規模・形状等 現存する範囲で、8.49m×7.46m面積63.3㎡、畝間の深さ最大9cmである。畝は6条検出されている。調査区外に続いており、竜舞山前停車場線新島遺跡でも同じ畠が検出されている。耕作土は、暗灰黄色シルト質のものが一部残存している。上部は削平され畝の下部のみ残存するが、残存部分で、畝間の幅は平均で31cm、畝の幅は平均で82cm、畝の間隔は平均で113cmとなっている。畝間に長径16～58cm、深さ3～17cmの小ピットが多く存在するが、その形状は、楕円形・隅丸長方形で、斜めに掘られているものもあるため、畝掘削時の農耕具痕が残った可能性が高い。畠確認面はほぼ水平であるが、西端部が北西に向かいやや低くなっている。よって、はっきりはしないが、原地形の傾斜に対して垂直の方向に畝が作られているといえる。
- ③時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、Hr-FA混土の上に作られており、中世の溝に切られているため、古墳時代後期以降中世以前のものである。竜舞山前停車場線新島遺跡では7世紀代の竪穴住居と同じ面で検出されているため、7世紀代の可能性が高く、4・5号溝とは併存していないと考えられる。
- ④出土遺物 なし

第8表 古墳時代後期～平安時代溝一覧表

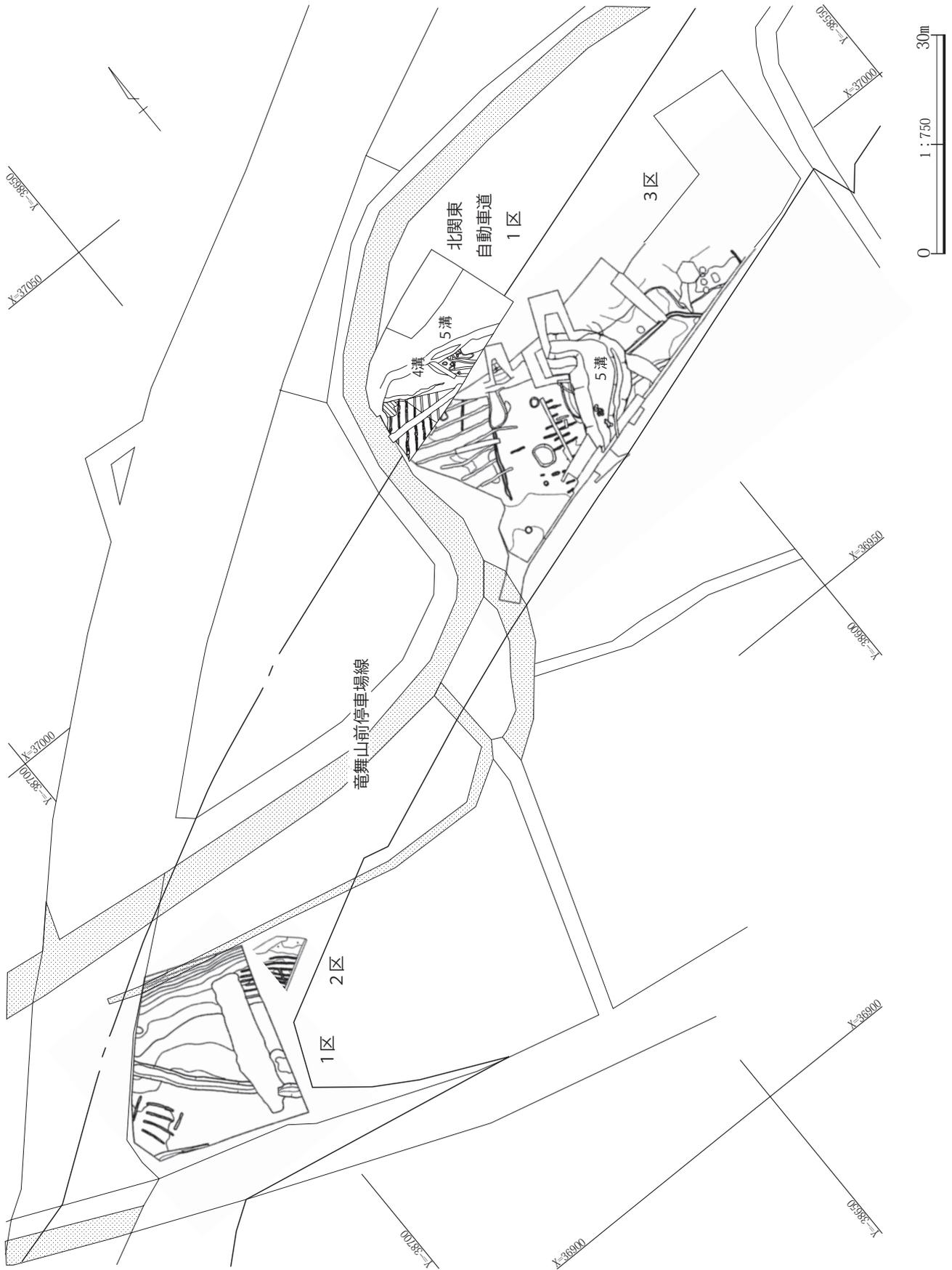
区	遺構名	位置 (Gr)	重複	長さm	最大幅m	最小幅m	深さcm	走向	備考
1	4号溝	003~007-617~622	2・3溝より古	[6.02]	[2.62]	[2.02]	51	N-42°-W	
1	5号溝	003~006-614~619	3溝より古	[3.99]	[3.06]	[1.42]	15	N-56°-W	

第9表 古墳時代後期～平安時代畝一覧表

区	遺構名	位置 (Gr)	重複	平面形態	長辺m	短辺m	深さcm	面積㎡	畝間数	畝間間隔平均cm	走向
1	1号畝	999~37006-624~633	1・2溝より古	長方形か	8.49	7.46	9	63.3	6	113	N-37°-E







第 25 図 2 面竜舞山前停車場線新島遺跡合成図



(3) 遺物 (観察表 第11表、PL. 6)

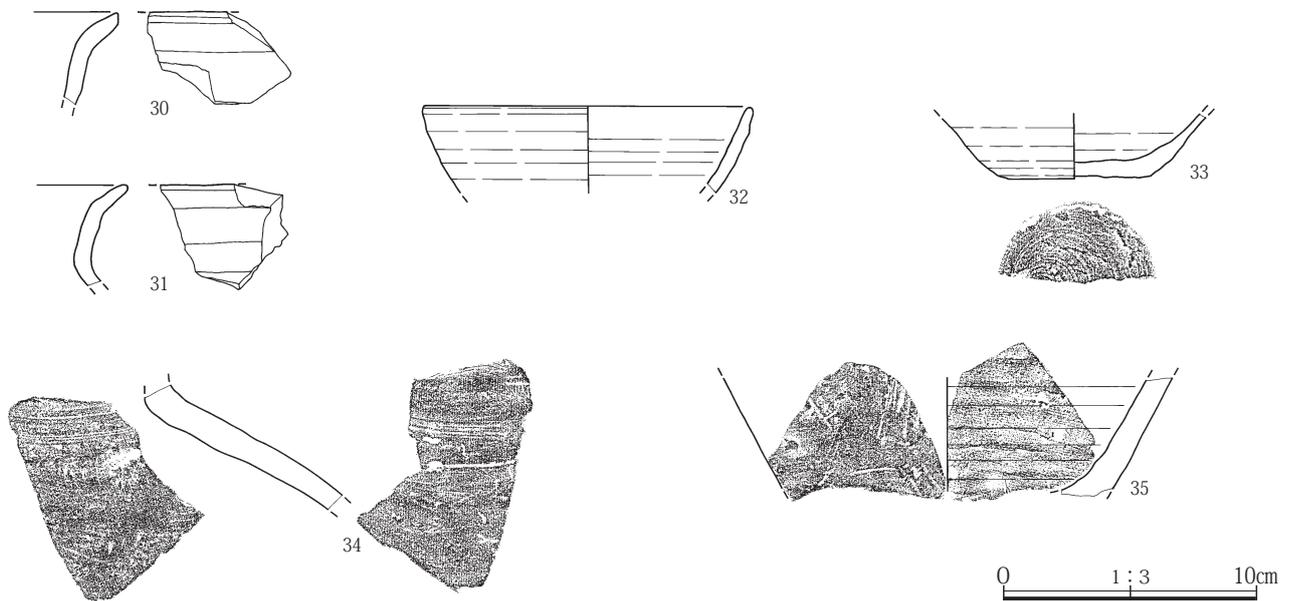
遺物は、土師器、須恵器が出土している。遺構外も含めてすべて1区から出土しており、2区からの出土はない。遺構に伴う可能性があるのは4号溝出土のものだけで、1・3号溝のものは混入品である。

**土師器** 杯、甕、台付甕、甌、その他総計53点が出土している。杯12点、甕38点と、甕が杯の3倍以上多くなっている。他の器種は1点ずつである。

**須恵器** 杯、甕、壺・瓶類総計17点が出土している。杯が12点で最も多く、他は数点の出土である。

第10表 古墳時代後期～平安時代出土遺物数量表

区	種別 器種	土師器					須恵器				総計	
		杯	甕	台付甕	甌	他	計	杯	甕	壺・瓶		計
1	1 溝	2					2				0	2
1	3 溝	7	11				18	6		2	8	26
1	4 溝	2	2	1	1		6	4	3		7	13
1	000-610G		1				1				0	1
1	000-620G		1				1				0	1
1	000-630G		4				4				0	4
1	1-2G	1	5			1	7				0	7
1	1-4G		3				3				0	3
1	IV層		8				8				0	8
2	1 トレ		2				2	2			2	4
	表採		1				1				0	1
	計	12	38	1	1	1	53	12	3	2	17	70

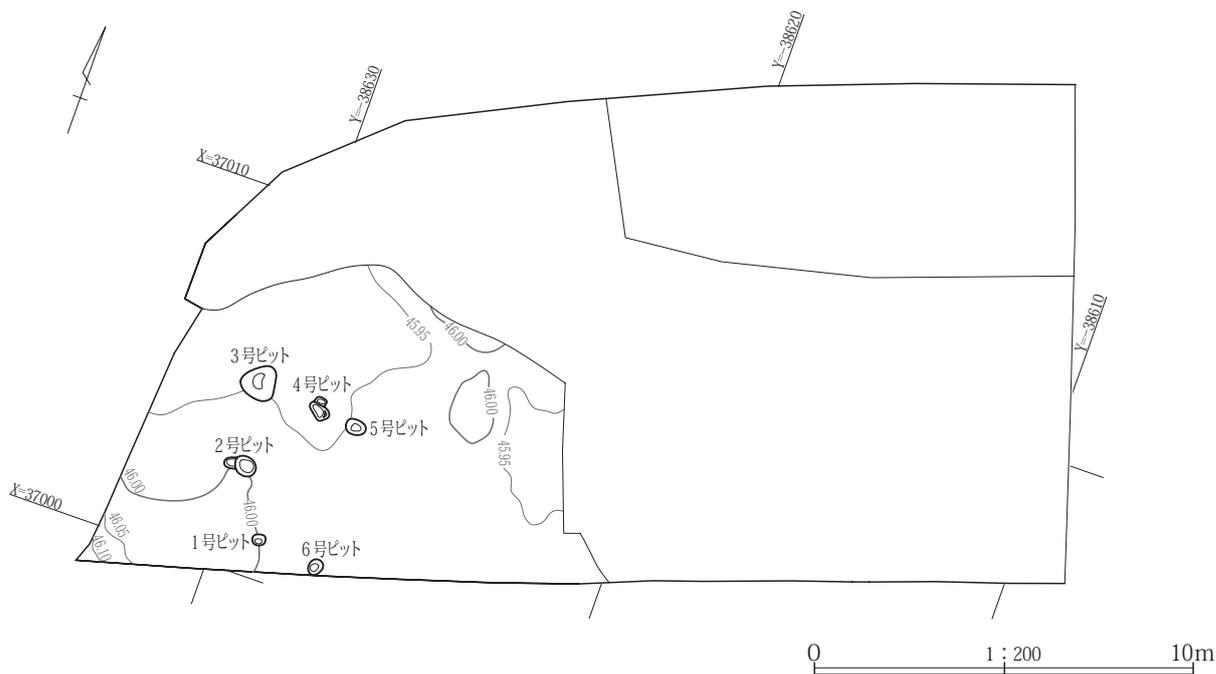


第27図 古墳時代後期～平安時代出土遺物

第11表 古墳時代後期～平安時代土器観察表 (第27図、PL. 6)

No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
30	土師器 甕	3 溝埋土 口縁部小片		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は内外とも横ナデ、外面口唇部に凹線が巡る。	
31	土師器 甕	3 溝埋土 口縁部小片		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は内外とも横ナデ。	
32	須恵器 杯	4 溝埋土 口縁部片	口 12.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
33	須恵器 杯	4 溝埋土 体部下半～底部片	底 6.0	細砂粒・白色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
34	須恵器 甕	4 溝埋土 胴部上位片		細砂粒・角閃/還元焰/灰	内外面にロクロ痕が残る、外面は一部にヘラナデ。	
35	須恵器 甕	4 溝埋土 胴部下位片		細砂粒・角閃/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部はヘラ削りであるが、器面磨滅のため単位不鮮明。	

### 3 古墳時代中期以前



第 28 図 古墳時代中期以前全体図

#### (1) 概要

古墳時代中期以前の遺構は、1区第3面で検出されている。ピットが6基検出されており、遺物は検出されていない。

#### (2) 遺構

##### ピット (第 29 図)

6基検出されている。

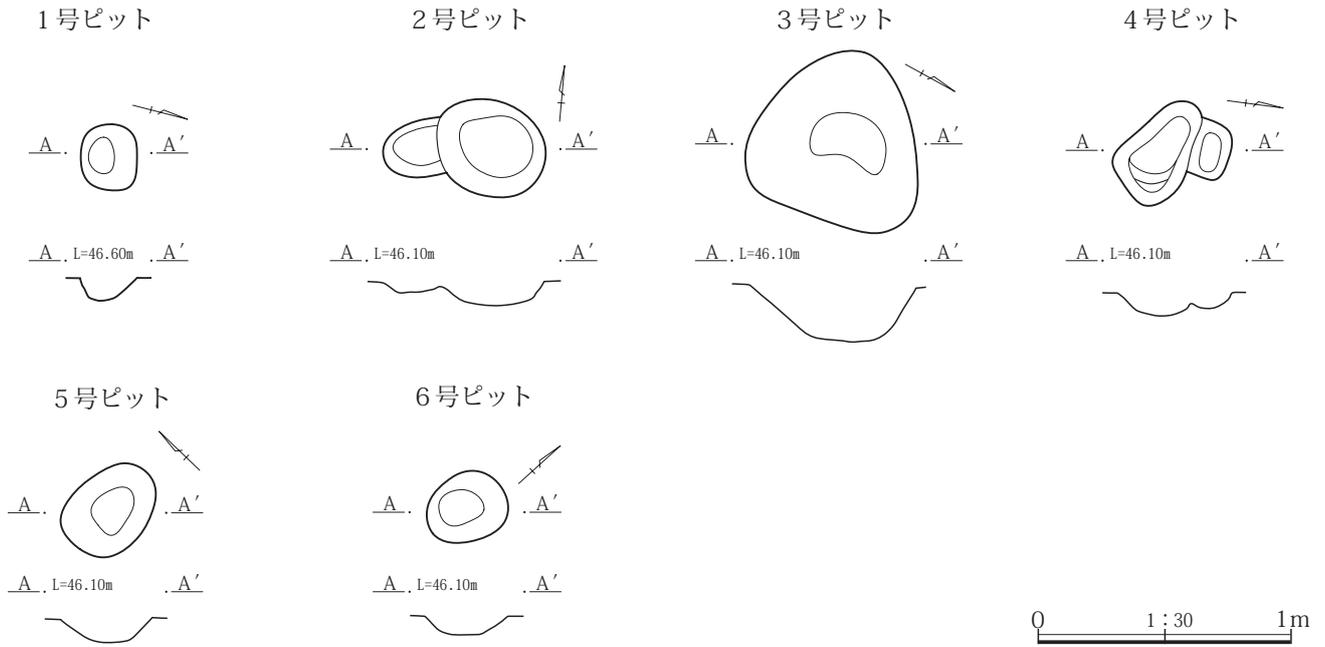
- ①分布 1区南西部に集中している。
- ②規模 長径 0.96~0.35 m 平均 0.63 m、短径 0.93~0.29m 平均 0.49 m、長径 / 短径 1.69~1.03 平均

1.30、深さ 31~10cm 平均 26cm、面積 0.65~0.09m<sup>2</sup> 平均 0.26m<sup>2</sup>である。ピット間の距離は、1-2 : 2.0 m 2-3 : 2.3 m 3-4 : 1.8 m 4-5 : 1.1 m 5-6 : 3.9 m 6-1 : 1.6 m となっており、等間隔であるとは言えない。配置も整然とした長方形になっておらず、ピットの規模もまちまちである。

- ③機能・時期 ピット間の距離が不揃いで、配置からも掘立柱建物とすることはできない。1か所に集中しているため、何らかのつながりがあった可能性もあるが、いずれのピットも柱痕等はないため、柱穴と断定できず、出土遺物もないため機能・時期等は不明である。
- ④出土遺物 なし

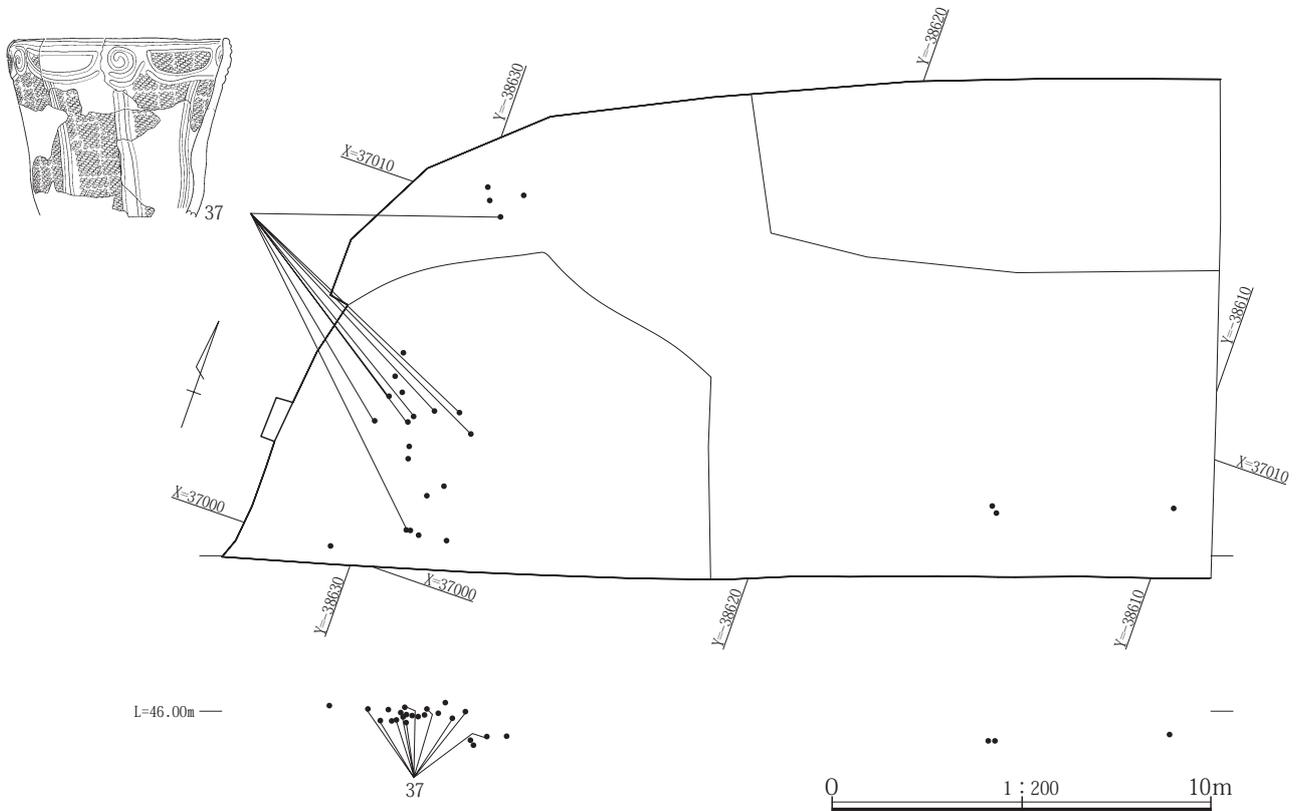
第 12 表 古墳時代中期以前ピット一覧表

区	遺構名	位置 (Gr)	重複	平面形態	長径 m	短径 m	長径/短径	深さ cm	面積 m <sup>2</sup>	主軸方位	備考
1	1号ピット	000・001-628・629		楕円形	0.35	0.29	1.21	12	0.09	N-74°-E	
1	2号ピット	002・003-629・630		楕円形	0.86	0.51	1.69	11	0.31	N-85°-E	小ピット重複
1	3号ピット	004・005-629・630		不正形	0.96	0.93	1.03	31	0.65	N-23°-E	
1	4号ピット	004-628		長方形	0.63	0.46	1.37	12	0.22	N-14°-W	小ピット重複
1	5号ピット	004-627		楕円形	0.54	0.41	1.32	13	0.18	N-86°-W	
1	6号ピット	000・001-627		円形	0.43	0.36	1.19	10	0.12	N-4°-E	



第 29 図 古墳時代中期以前ピット

#### 4 縄文時代



第 30 図 縄文時代遺物出土状況

### Ⅲ 検出された遺構と出土遺物

#### (1) 概要

縄文時代の遺構は検出されていないが、1区4面上の遺物包含層から土器が16点、石器が5点出土している。包含層は浅黄色のローム質土である。

周辺地形は北西から南東に向かって低くなっているため、北西方向の調査区外に集落等の遺構があり、そこから流入した遺物である可能性が高いが、土器の摩耗度は低く、破片が多く接合した個体もあるため、一概に自然営力により流されてきたとすることはできず、人為的に運ばれた可能性もある。

#### (2) 遺物（観察表 第14表、PL.6）

##### 土器

16点出土している。小破片が多く、時期の判別が難しいものが多いが、前期から後期の土器が確認された。

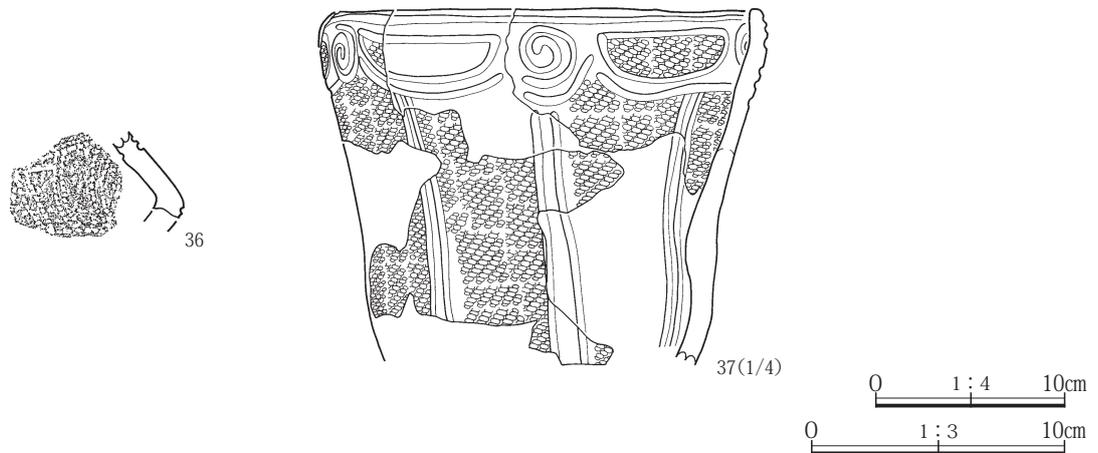
前期は、前葉～中葉のものと同後葉の諸磯b式期のものが、中期は後葉加曾利E3式期のものが、後期は前葉のものが出土している。時期不明のものも11点ある。37の深鉢は、加曾利E3式期のものであるが、包含層中の10点以上の破片が接合している。

第13表 縄文時代出土土器数量表

分類	前期			中期	後期	時期不明	計
	前～中葉	諸磯b	小計	加曾利E3	前葉		
数量	2	1	3	1	1	11	16

##### 石器

ホルンフェルス製の剥片が5点231.2g出土しているだけである。



第31図 縄文時代出土遺物

第14表 縄文時代土器観察表（第31図、PL.6）

No	種別	器種	残存	出土位置	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
36	縄文	深鉢	口縁下破片	1区遺構外	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	良好	靴先状口縁の口縁下の部位。2条1単位の点列により幾何学モチーフを描く。	諸磯b式
37	縄文	深鉢	口縁～胴部破片	1区遺構外	粗砂、白色粒	橙	普通	推定口径22.3cm。緩いキャリパー状の器形。口縁下に沈線による渦巻紋、楕円状モチーフを描いて横位に連続させ、以下、2条1単位の沈線を垂下、RLを充填施文する。	加曾利E3式

## IV 自然科学分析

### 1 新島遺跡における地質調査

上記調査は、新島遺跡の基本土層中の主にテフラの分析を行い、土層の年代を特定する目的で、株式会社古環境研究所に委託した。調査結果は以下のとおりである。その結果As-C・Hr-FA・Hr-FP等が確認され、それを含む土層の年代を絞り込むことができた。なお、本調査は北関東自動車道建設に伴い、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われている道原遺跡、矢部遺跡、新島遺跡、只上深町遺跡において行ったもので、ここでは、このうち新島遺跡分のみ掲載し、他の遺跡の分は割愛したが、「3. まとめにかえて」と「文献」は、すべての遺跡を対象とした記述となっている。

#### 1. はじめに

北関東自動車道建設に伴い、群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が行われている新島遺跡において地質調査を行い、土層の観察記載を行った。

#### 2. 新島遺跡1区の土層の層序

新島遺跡1区では、下位より灰褐色土(層厚3cm以上)、暗灰褐色土(層厚9cm)、黄灰色軽石(最大径2mm)を多く含む白色軽石(最大径4mm)混じり暗灰褐色土(層厚24cm)、灰色砂層(最大層厚4cm)、砂混じり灰褐色土(層厚4cm)、暗灰褐色土(層厚4cm)、淘汰が良く若干桃色を帯びた灰色砂層(層厚5cm)、灰褐色粘質土(層厚20cm)、灰褐色砂質土(層厚16cm)、白色砂層(層厚0.3cm)、灰褐色表土(層厚58cm)が認められる(第32図)。

土層の観察で認められた比較的細粒の黄灰色軽石と粗粒の白色軽石については、その岩相から各々As-Cと、Hr-FAまたはHr-FPに由来する可能性が考えられる。なお発掘調査では、灰色砂層の下面から畑跡が検出されている。

#### 3. まとめにかえて

土層の観察の結果をもとに、土層の層序について述べ

た。本地区では、従来群馬県域で検出されているテフラ(火山灰)のほかに、泥石流起源の特徴的な洪水堆積物をはじめとする複数の洪水起源の砂層が認められる。洪水層のうち、泥石流起源の特徴的な洪水堆積物については、818(弘仁9)年あるいはそれに近いとして年代指標に使える可能性がある。またそれが検出された矢部遺跡以外にも、古い粗粒の軽石を含んでいたり桃色がかった色調をもつ砂層として、他の遺跡でも追跡できる可能性がある。さらに、その下位の洪水堆積物については、東今泉鹿島遺跡において、上位から8世紀後半以降の住居址が検出されている洪水堆積物に対比される可能性がある。これらの洪水堆積物と、東山道をはじめとする遺構との関係も興味深い。

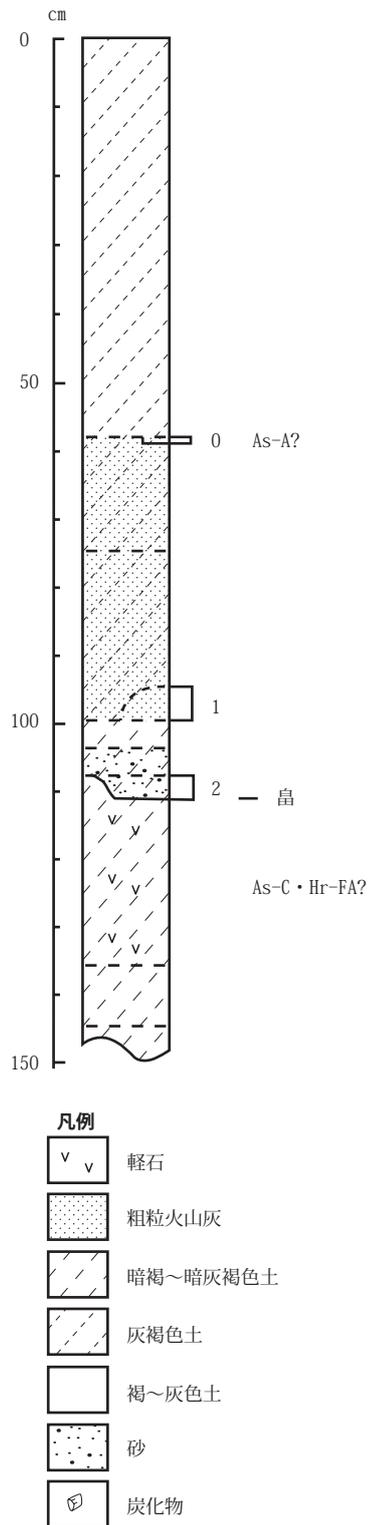
2004年度以降に行われている北関東自動車道建設に伴う発掘調査は、渡瀬川河岸地域の遺構・遺物の記載、考古学資料の収集のみならず、従来詳細な研究に乏しかった本地域における遺跡の立地や展開に関する地形発達史や、比較的新しい時代の地質構造の解明のまたとない機会となっている。これまでも渡瀬川河岸地域より西の遺跡で高精度の分析により環境や土地利用の変遷に関する分析データの蓄積が行われてきていることから、引き続き地形地質学研究者による詳細な土層断面観察と、同じ高精度の分析による資料の蓄積が期待される。

なお、当然今後の調査で新たに検出される土層や、考古遺物、さらに材などの自然遺物に関する分析が必要とされる場合がある。とくに近年では、加速器質量分析(AMS)法の開発により、微量の試料でも高精度の放射性炭素(14C)年代測定が可能となっている。信頼度の高い測定機器による年代値は、おおよそ縄文時代以降については年輪年代などを基にした年代較正により、以前より遙かに高い信頼度をもって、暦年に近い年代値を提供できるようになっている。したがって、溝状遺構の基底部分や河道跡から材(化石)が検出されたおりに、14C年代測定が実施されると、遺構の年代のみならず河道変遷史などを明らかにする材料ともなる。

#### IV 自然科学分析

##### 文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(2004)「年報.23」
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会336p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦(1993)四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代. 地質雑, 99, p.787-798.
- 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990)赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析-. 信濃, 42, p.755-772.
- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 沢口 宏(1966)大間々扇状地の地形発達史-予報-. 群馬県高校社会科学研究会会報, no.7, p.12-24.
- 沢口 宏(1977)渡良瀬川扇状地の地形とその教材化. 県立太田女子高等学校研究集録, no.6, p1-18.
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉(1996)関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.



第 32 図 新島遺跡 1 区の土層柱状図  
(数字はテフラ分析の試料番号)

## 2 2区出土骨壺内人骨について

上記鑑定は、新島遺跡出土の骨壺内の人骨について、骨の種別、被葬者の年齢・性別等を明らかにするために、足利工業大学講師宮崎重雄氏に依頼した。その結果、成人の女性である可能性が高くなった。詳細は以下のとおりである。

蔵骨器に納められていた数10片の火葬人骨で、最大骨片は大腿骨骨体部の59.2mmである。

他に確認されたのは、脳頭蓋片、右上腕骨遠位端片、尺骨骨体部片、脛骨骨体部片などで、それぞれの保存

最大長は順に40.7mm、53.4mm、42.4mm、51.1mmである。このうち上腕骨では、骨端部が癒合していることで成人のものと判断される。

火葬の際に多少収縮するにしても、どの部位も小さめで、女性の可能性が考えられるが、確かなものではない。

焼骨の特長をよく残し、亀裂や歪みが目立つ。このことは肉が付いている状態で火葬されたもので、死後何年か経過して乾燥状態で焼かれたものではない。すなわち再葬の可能性は少ない。白色から黒色まで加熱温度によってさまざまな色合いを呈している。



骨壺内人骨出土状況



出土火葬骨

## V 総括

新島遺跡では、縄文時代から近現代にかけての遺構、遺物が検出されている。各時代の様相をまとめて総括としたい。

### (1) 縄文時代

新島遺跡において、縄文時代の遺構は検出されず、遺物が16点出土しただけである。最も古い遺物は前期前葉～中葉のもので、2点のみの出土である。小破片で詳細な時期は不明であるが、この時期に人の居住活動が開始されたといえよう。しかしながら、遺物量は極端に少ないため、居住域の中心は近隣ではなくやや離れた場所にあったと考えられる。これ以後、前期後葉諸磯b式期、中期後葉加曾利E3式期、後期前葉の土器がそれぞれ1点ずつ出土している。出土量が極端に少なく、前期同様居住域の中心は離れた場所にあると考えられるが、中期のものは、器形を復元できる程度の残存状況であるため、他の時期よりも、居住域が近かった可能性はある。

### (2) 古墳時代中期以前

古墳時代中期以前は、基本土層のⅦ層下面で検出される遺構の時期である。Ⅵ・Ⅶ層に含まれる黄灰色・白色の軽石は、地質調査によりAs-Cと、Hr-FAまたはHr-FPに由来すると考えられるが<sup>(1)</sup>、Ⅷ層出土遺物がないため、Hr-FA以前で縄文時代以降ということ以外詳細な時期は不明である。遺構は、ピットが6基だけである。柱痕等はなく柱穴とは考えられず、遺物も出土していないため、何らかの人為的な活動の痕跡と考えられるが、居住域やその他通常の活動域とは隔絶していると考えられる。

### (3) 古墳時代後期～平安時代

古墳時代後期～平安時代の遺構は溝2条、畠1面である。この時代より前は、隣接する竜舞山前停車場線の調査区では遺構遺物は検出されていないが、これ以降の時代で検出されている。北関東自動車道の1区2面と竜舞山前停車場線の3区2～6面がこの時期に相当すると考えられるため、北関東自動車道では複数の時代の遺構が

同一面で調査されているといえる。遺構を見ると、北関東自動車道の1区4号溝と竜舞山前停車場線3区3面の5号溝、北関東自動車道の1区1号畠と竜舞山前停車場線3区5面の畑跡が同一遺構と考えられる。

竜舞山前停車場線の報告書では、5号溝は818年の大地震による洪水災害の復旧を目的としたものと考えられている<sup>(2)</sup>。とするならば、北関東自動車道4号溝は竜舞山前停車場線5号溝と同一と考えられるため、掘削時期は818年をあまり下らない年代であり、災害復旧用の用水路であったということになる。4号溝の出土遺物を見ると9世紀代と考えられる須恵器杯等が出土しているため、年代的な矛盾はないといえる。

北関東自動車道1号畠は走向・レベル等から竜舞山前停車場線5面の畑跡と同一と考えられる。この畑は7世紀前半と考えられる住居と同一面で検出されているため、この時期を大きく遡るもしくは下る可能性は少ないといえよう。よって、北関東自動車1号畠は7世紀前半を中心とした年代とすることができる。なお、畠作物については、耕作土も一部しか残存していないため、推定することは難しいが、竜舞山前停車場線矢部遺跡の畠状遺構の土壌分析において、稲のプラントオパールは検出されなかったため、稲以外の作物が栽培されていたことが想定される<sup>(3)</sup>。

以上のことから、古墳時代後期～平安時代の新島遺跡は、当初は、竪穴住居が存在するが数は少なく、遺物量もかなり少ないことから、ごく小規模な集落が作られており、周囲で畠作を営んでいる状況であったものが、その後何度も洪水に遭遇し、比較的大規模な用水路を持った生産域に変わっていったと考えられる。竜舞山前停車場線の報告書では、この変化を東山道駅路の敷設に伴う公的施設や耕地および導水路の整備によるもので、その時期は8世紀以降に下ると想定している。しかしながら、北関東自動車道の調査により八ヶ入、大道西、大道東、鹿島浦の各遺跡で東山道駅路と推定される道路が検出されているが、その路線を直線で延長すると新島遺跡の800～900m南を通ることになり、やや離れた位置となっ

てしまう。また、大道東遺跡の報告書によると、推定東山道駅路の時期は、長く見ても7世紀第3四半期から8世紀第2四半期の間になり、年代的にもややずれることになる<sup>(4)</sup>。よって、新島遺跡における集落から生産域への変化を駅路敷設に伴う整備と直接結びつけることはできなくなる。

では他にどんな要因が考えられるであろう。新島遺跡から約2.5km東にある古氷条里制水田跡では、浅間B軽石下の水田が検出されており、それが、条里地割ののっているとされている。畦畔の走向は東西方向で北に10°程傾いている。前述の北関東自動車道の調査で検出された推定東山道駅路は、東西方向で南に8°程傾いているため、条里とは方向がずれている。また、水田の開削時期は、耕作土出土遺物や隣接する二の宮遺跡の集落の時期等から、奈良時代後半から平安時代前半と考えられている<sup>(5)</sup>。よって古氷条里制水田跡における条里地割の導入は、東山道駅路と同時あるいは駅路を基準として行われたものではなく、全く別に行われたものということになる。

筆者は以前、前橋台地南部の条里地割の導入について、9世紀以降のある段階で大規模な開発をともなって行われた旨の論考を行ったことがあるが<sup>(6)</sup>、新島遺跡や古氷条里制水田跡のある太田市北東部においても奈良時代後半から平安時代前半にかけて大規模な水田開発が行われ、そのために以前の集落も水田化されたことは充分考えられるであろう。

#### (4)中世以降

中世以降は第1面で検出される遺構の時期である。溝3条、土坑3基、ピット1基が検出されている。時期的には竜舞山前停車場線の3区の1面と、北関東自動車道の1区1面が同じになると考えられるが、確認面のレベルは竜舞山前停車場線の方が1m近く高いため、同一面とすることはできない。遺構も、走向を見ると、竜舞山前停車場線の4号溝が北関東自動車道の1号溝または2号溝に続くように見えるが、底面のレベルで竜舞山前停車場線の4号溝が60cm以上高いため、同一の溝とすることはできず、北関東自動車道の調査区では、竜舞山前停車場線4号溝は、削平され残っていないと考えられる。

北関東自動車道3号溝は、竜舞山前停車場線の調査区

内では検出されていないため、調査区外に続いていると考えられる。調査区の北側を流れる矢場川の旧河道と考えられ、当遺跡の西に隣接する、北関東自動車道矢部遺跡でも矢場川沿いで検出されている。北側の立ち上がりは調査区外で不明であるが、現存値で最大幅14m以上、深さは1.1m以上と大規模であるため、渡良瀬川の旧流路の一つであると考えるのが妥当であろう。時期は、出土遺物が少なく詳細は不明であるが、確認面や遺構の新旧から中世以降であることは間違いない。大道東遺跡(1)の報告書に、渡良瀬川の変流の時期が、利根川変流と同時期の中世後半という可能性も否定できないとあるが<sup>(7)</sup>、このことと矛盾しない結果となっている。

2区検出の遺構は、土坑・ピットが計4基だけだが、遺構外では火葬骨・銭貨の入った骨壺が出土している。壺は在地系の土器で近世から近現代のものと考えられる。火葬骨は、破片が数10片納められており、最大でも6cm程度の小破片である。部位が確認されたのは、大腿骨、脳頭蓋、右上腕骨、尺骨、脛骨等で、成人のもの判断されており、どの部位も小さいことから女性の可能性が考えられている<sup>(8)</sup>。銭貨は銅銭が15枚、鉄銭が2枚出土した。鉄銭もおそらく寛永通宝と考えられるため、鉄1文銭の初鑄年1738年以降のものであることは間違いないが、下限がどこまで下るかははっきりしない。骨壺出土地点周辺からも銅銭が出土しているため、近隣に土坑墓等の遺構があり、耕作等で削平され、散乱した遺物が出土した可能性もある。

注

- (1)IV-1参照
- (2)藤巻幸男 2006 「第3章 土地利用の変遷 -新島遺跡3区を中心として-」『矢部遺跡・新島遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 「第5篇第1章II.矢部遺跡における植物珪酸体(プラントオパール)分析」『矢部遺跡・新島遺跡』
- (4)新井 仁 2010 「2 集落及び道路遺構の変遷」『大道東遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5)山田精一 2009 「第3節 考察」『古氷条里制水田跡・二の宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6)新井 仁 2001「群馬県における平安時代の水田開発について「前橋台地南部を中心とした試論」」『研究紀要』19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
新井 仁 2008 「条里地割導入後の水田と集落の「様相」前橋台地南部地域を中心として」『研究紀要』26 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7)岩崎泰一 2009 「1.地理的環境」『大道東遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (8)IV-2参照

# 写 真 图 版





遺跡西上空から渡良瀬川方面を望む(西から)



1区周辺遠景(南上空から)



遺跡遠景 (西から)



1区遠景 (北から)



1区3面全景(東から)



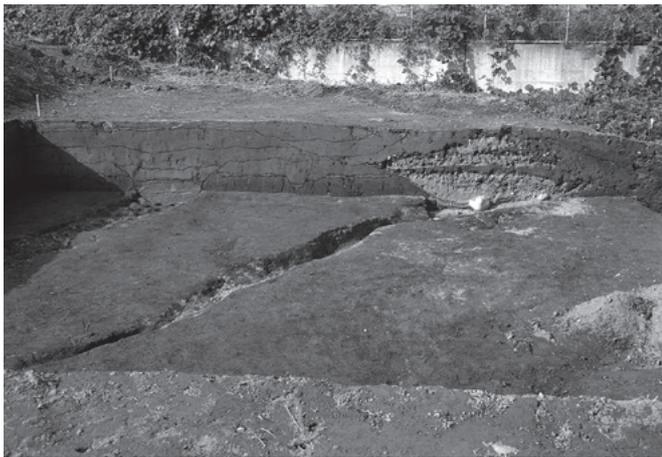
1区北部3面全景(北東から)



1区1号溝全景(南から)



1区1号溝・1号島全景(北西から)



1区2号溝全景(南から)



2区西半部全景(北東から)



2区西半部調査風景(北から)



2区東半部全景(北東から)



2区東半部下面トレンチNo.5(西から)



2区東半部近世骨蔵器出土状況(西から)



1



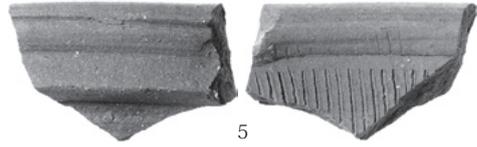
2



3



4



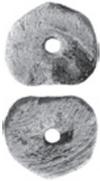
5



6



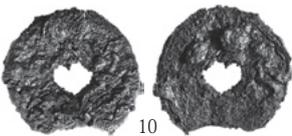
8 (1/4)



7 (1/2)



9 (1/6)



10



11



12



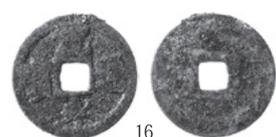
13



14



15



16



17

PL.6



18



19



20



21



22



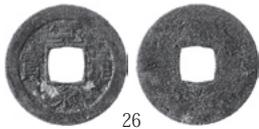
23



24



25



26



27



28



29

中世以降出土遺物



30



31



32



33



34



35

古墳時代後期～平安時代出土遺物



36



37(1/4)

縄文時代出土遺物

# 報告書抄録

書名ふりがな	にいじまいせき
書名	新島遺跡
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第521集
編著者名	須田正久／高井佳弘／新井仁
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20110630
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	にいじまいせき
遺跡名	新島遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしただかりちょう
遺跡所在地	群馬県太田市只上町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0393
北緯（日本測地系）	362012
東経（日本測地系）	1380413
北緯（世界測地系）	362023
東経（世界測地系）	1380402
調査期間	20051001-20060228/20080901-20080930
調査面積	1334
調査原因	道路建設
種別	田畑/その他
主な時代	縄文/古墳/平安/中近世
遺跡概要	田畑-平安-畠1/その他-縄文-土器/古墳-ピット6/平安-溝2-土器/中近世-溝3+土坑・ピット4-陶磁器+土器+石製品+銭貨
特記事項	洪水層下の平安時代畠 火葬人骨の入った近世骨壺 渡良瀬川の旧流路である矢場川の旧河道
要約	縄文時代から近世の複合遺跡。縄文時代中期後半～後期前半の土器や、洪水起源と考えられる土砂に埋もれた平安時代の畠、渡良瀬川の旧流路である矢場川の旧河道等が検出されている。また、火葬骨、寛永通宝の鉄銭・銅銭の入った骨壺も出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第521集

## 新 島 遺 跡

---

平成23年（2011）6月23日 印刷

平成23年（2011）6月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話（0279）52-2511（代表）

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所

---